マリー・シュタイナー
＝フォン・ジーフェルスについて

〔目次〕

■マリー・シュタイナー
＝フォン・ジーフェルスについて①

・ルドルフ・シュタイナー
『わが生涯の歩み』第31章より
・ハンス・W・ツビンデン
「永遠の個体性 ——
　マリー・シュタイナー・フォン・ジーフェルスを偲んで」

（ルドルフ・シュタイナー全集補遺、およびアーカイブからの公開物
第17号 1967年復活祭（1985年再版）
D17 マリー・シュタイナー生誕100年）

・C・S・ピヒト
「マリー・シュタイナー夫人への追悼の言葉」

（ルドルフ・シュタイナー全集補遺、およびアーカイブからの公開物
第43/44号 1973年クリスマス（1985年再版）D43_44）

■マリー・シュタイナー
＝フォン・ジーフェルスについて②

・ ヴォルフラム・グロデック：
「マリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルス追悼展
ルドルフ・シュタイナー遺稿管理局アーカイブ展より」

（ルドルフ・シュタイナー全集補遺、およびアーカイブからの公開物
第43/44号 1973年クリスマス（1985年再版）D43_44）

■マリー・シュタイナー
＝フォン・ジーフェルスについて③

・ ヘラ・ヴィースベルガー
「マリー・シュタイナーとルドルフ・シュタイナーの
ノヴァーリス研究
シュトゥットガルトの
「ノヴァーリス言語造形・演劇芸術学校」における、
マリー・シュタイナー没後25周年記念講演」

（ルドルフ・シュタイナー全集補遺、およびアーカイブからの公開物
第43/44号 1973年クリスマス（1985年再版）D43_44）

■マリー・シュタイナー
＝フォン・ジーフェルスについて④

リディア・ジェンティッリ＝バラット（記録者）
「マリー・シュタイナーの思い出」（1947年）

付：「クラウス書簡」（1945年）から2026年4月17日までの
マリー・シュタイナー設立による「遺産管理財団」と
ドルナッハ「一般人智学協会」の完全な和解までの経緯について

神秘学遊戯団

■マリー・シュタイナー
＝フォン・ジーフェルスについて①

・ルドルフ・シュタイナー
『わが生涯の歩み』第31章より
・ハンス・W・ツビンデン
「永遠の個体性 ——
マリー・シュタイナー・フォン・ジーフェルスを偲んで」

（ルドルフ・シュタイナー全集補遺、およびアーカイブからの公開物
第17号 1967年復活祭（1985年再版）
D17 マリー・シュタイナー生誕100年）

・C・S・ピヒト
「マリー・シュタイナー夫人への追悼の言葉」

（ルドルフ・シュタイナー全集補遺、およびアーカイブからの公開物
第43/44号 1973年クリスマス（1985年再版）D43_44）

●ルドルフ・シュタイナー
『わが生涯の歩み』第31章より

（……彼女の演劇学校での修練は、）彼女の才能に美しい完成をもたらしていた。私がベルリンで彼女と知り合った当時も、彼女は芸術的な発声の様々な方法を学ぶために、その修練をまだ続けているところであった。
マリー・フォン・ジーフェルスと私は、間もなく深い友情で結ばれるようになった。そして、この友情という基礎の上に、極めて広範な、ありとあらゆる精神的・霊的分野における共同作業が展開されていったのである。人智学だけでなく、詩の芸術や朗唱の芸術を共に培うことが、瞬く間に私たちの生きる目的となっていった。

●ハンス・W・ツビンデン

「永遠の個体性 ——
マリー・シュタイナー・フォン・ジーフェルスを偲んで」

〔訳註：ハンス・W・ツビンデン博士（Dr. Hans W, Zbinden,1899–1977）：スイスの人智学的医師、チューリヒ・シュタイナー学校の共同設立者、ゲーテアヌム医学部門の指導者〕

○基本的な視点

マリー・シュタイナー・フォン・ジーフェルスの生涯を、
単なる外的な伝記や個人的な業績の記述ではなく、
「宇宙的にしか把握し得ない」ものとして捉える。

それは、キリスト教的人類発展における「自我性」の実現として位置づけられ、
家族・民族の絆や肉体・エーテル・アストラルの外殻を超えて
「普遍的な人間性（Menschentum）」へと上昇し、
キリストの力（愛）を通じて自由へと導かれる在り方である。

その核心は、創造する「言葉（ロゴス）」を地上の現実にもたらし、
下降の諸力と戦うことにある。

マリー・シュタイナーは、言語造形、オイリュトミー、
ルドルフ・シュタイナーの言葉の編集・出版という
三つの仕方で「言葉に仕え」、自らをその器官へと形成した存在として描かれる。

彼女の生涯は、前世からの成熟の継続であり、
真実性の力・敵対への忍耐・私生活の完全な放棄という犠牲を通じて、
霊と共に生きる条件を自ら体現したものとして理解される。

○要点

・宇宙的・歴史的背景での把握：

生と死の間の出来事を超えた視野が必要。

ルドルフ・シュタイナー自身も「宇宙的にしか把握し得ない」と述べた。
外的な伝記的描写では本質が捉えきれず、
人類の発展の「その瞬間」において意義を持つものとして位置づける。

・キリスト教的個体性の実現：

ルカ14:26（家族・命まで顧みない）と
パウロの「もはやわたしが生きているのではない。
キリストがわたしの内に生きている」の言葉を手がかりに、
血縁・民族性の束縛から抜け出し、
自己に立脚した自我が愛を通じて自由へ導かれる在り方を体現。
従属ではなく、最高の自我発展によって霊の自己意識的な器官となる。

・言葉（ロゴス）への奉仕という主たる大業：

抽象的な言葉から働きかける言葉へ。
言語造形（Sprachgestaltung）において、
音声・色彩・イメージ・運動の中に創造的諸力を体験し、
思考を硬直から解放して諸世界を体験する道を指し示した。
オイリュトミーの引き受け・発展、
言葉の合唱・朗唱を通じたイマジネーション的体験の創出、
そしてシュタイナーの講義録・著作の編集・出版管理がこれに含まれる。
「そこから生じたすべてのものは、実に彼女によって初めて本来の形となった」

・生涯の成熟の諸相：

少女時代の「宗教とは何か」という燃える問い
（牧師の「再結合」という答えへの違和感）、
芸術（特に演劇・朗唱）を通じた精神探求、
パリでの教育とシュレーとの出会い・翻訳、
名声への道を妥協せずに辞退した決断、
シュタイナーとの出会いと神智学協会運営への参加
（セクト主義・感傷癖の回避）。
カルマは宿命ではなく打ち破り得るものであり、誘惑に屈さなかった点を強調。

・シュタイナーとの関係と没後の役割：

オイリュトミーの創始・発展、
言語芸術の拡充（神秘劇・ファウスト・シラー・シュテフェンの上演）、
出版の管理を通じて彼の全業績を守った。
没後は大規模総会を支え、敵対者からもその尽力を認められた。

※シュタイナーの死の直前の言葉：
「判断において共に感じ、共に考えることができるのは、
やはり私には君しかいない」。

彼女の言葉は、彼の精神（遺志）にかなっているか、警告を遵守しているか、
未成熟な傲慢を避けているかを自らに問う基準として残されている。

・全体の意義：

マリー・シュタイナーの存在は、
人類が「意識の力」によって神々の導きから自我の孤独へと下った道を
逆方向に辿り直し、自由・愛・意志を呼び覚ます可能性を、
具体的な芸術的・霊的実践を通じて体現した点にある。

○本文

外的な世俗の喧騒から遠く離れ、人間の安逸への渇望がもたらす執着やあくせくした営みからも遠く離れ、さらには、精神的な生命や探求の代わりに人間を破滅に導くお役所仕事がはびこる人間世界の深淵よりも遥か高くに、マリー・シュタイナー夫人はその晩年の多忙な日々を過ごされた。しかしその一方で、夫人は人類の諸問題に自らのすべてを捧げ、自身の視野に入るあらゆる人物に対して、開かれた精神と鋭い感受性を宿した心の力をもって向き合われていた。

汚れなき氷河の彼方に輝く日の出、そして赤、青、緑といった、崇高なる純粋さを象徴し、太陽の光の中で最高級のルビー、サファイア、エメラルドのようにきらめく結晶のような色彩 —— これらは、夫人にとって現世における最後の転生となった日々にふさわしい光景であった。それはまさに、この模範的な生涯の総決算とも言うべき、真に荘厳な一幅の絵のようであった。

この生涯に目を向けるとき、あるいはすでに何度もそれを描写しようと試みたことがあるとき、また、マリー・シュタイナー夫人との人生における出会いを記憶の魂の中に呼び起こすとき、私たちは、その視線を単に生と死の間に横たわる出来事の期間だけに向けさせれば済むものではないということを知る。時間的な視点で見れば、この生涯はロシアのどこかで始まり、ベーテンベルクで終わった。そしてその間には、数多くの個々の出来事が横たわっており、それらは確かに「エンテレケイア（固有の精神的実在）」の文字（しるし）を形作っている。しかし、その本質を見極めるには、まさに広大な視野が必要とされる。ルドルフ・シュタイナー自身もかつて、彼女の生涯について「宇宙的にしか把握し得ない」と語ったことがある。いずれにせよ、他の卓越した人物の伝記が書かれる際によく行われるように、あらゆる外的な観点からこの生涯を描写することは可能であり、そうすれば、感謝と感嘆の念を呼び起こす豊かで美しい像が立ち現れる。それは、既存の追悼文や伝記に目を通せば認められることである。
しかし、人生と仕事の中でマリー・シュタイナー夫人に出会った人々にとっては、何か満たされないものが残り、何かが語られないままになり、この生涯の肝心なもの、本質的なものが描写されないままになっていると感じられるのである。

マリー・シュタイナー夫人の活動と存在が真の色彩を帯びるのは、それを人類の歴史的な生成という背景の上に置き、いわばそれが人類の発展にとって意義を持つようになった「その瞬間」を視野に収めたときだけである。

キリスト教的な人類の発展の始まりにおいて、二つの重要な言葉が与えられた。一つはキリストの言葉である。

「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、その父、母、妻、子供、兄弟、姉妹、さらに自分の命までも顧みないならば、わたしの弟子になることはできない」
（ルカによる福音書14章26節）。

もう一つはパウロに由来する、あの有名な言葉である。

「生きているのは、もはやわたしではない。キリストがわたしの内に生きておられるのである」。

どちらの言葉も、人類の発展にとって重大な意味を持ち、それを決定づけるものである。ここで呼びかけられているのは、「自我性（Ichheit）」であり、個体性であり、すなわちエンテレケイアである。それは、家族や民族という絆に属する、地上における根源的な始まりのただ中で呼びかけられている。ここで「顧みない」あるいは「去る」と言われているのであって、戦うのでも憎むのでもない点に注意しなければならない。それどころか、そのように行動する者こそが、キリストの力を分かち合うことができるのである。そして、この力とは「愛」を意味する。したがって、次のようなことが見て取れる。家族や民族の絆、狭量さ、束縛 —— つまり肉体やエーテル体の外殻、さらにはアストラル体の外殻（なぜなら民族性はこれらの中にも、言葉、方言、民衆語において魂を形成するように作用しているからである） —— から抜け出し、人類の中における個体性としての生へと上昇すること。キリストの力は、その個体性を、あらゆる人に対して理解と愛をもって向かい合わせる。そこにはいかなる障壁も存在しない。これが、無味乾燥かつ抽象的に表現された本質である。そしてこれこそが、マリー・シュタイナー夫人の立ち位置を特徴づけている。彼女は「普遍的な人間性（Menschentum）」へと自らを高めていたのである。

これが可能であるのは、自己自身に立脚した「自我（Ich）」だけであろうことは明白である。そのような自我は、ルドルフ・シュタイナーがしばしば詳述したように、そうでなければ自由が不可能になってしまうがゆえに、誤りや過ちの可能性を確実にその内に含んでいる。ここでは、一見してすぐには明らかにならない秘密、すなわち「キリストの力は愛を通じて自由へと導く」という秘密に触れられているのである。

第二の言葉の中には、「自我は自らを通じてキリストの力を作用させるべきである」ということが含まれている。しかし、そこには、批判を拒絶するような上位の原理に対する「従属的な態度」は存在しない。

従属ではなく、自我の到達し得る最高の発展と強化であり、それによって自我は、事物の本質に、ロゴスから力を得て生成するものに、意識的に参画するのである。自我は、それ自体の存在の根源的本質である「霊（ Geist）」の、自己意識的な器官となる。

これらは、通常の道徳に奉仕する二つの言葉などではなく、歴史的事実となった発展上の真理である。これこそが、ルドルフ・シュタイナーの人智学から明白になることである。

世界の言葉（ロゴス）、すなわち創造する言葉を、人間の地上生活という現実の中にもたらし、下降の諸力と戦うこと —— それこそが、マリー・シュタイナーの主たる大業であった。

「言葉（神聖なる語り）を体験することは、人間の内に秘められた秘密の封印を解くかのような、霊的認識の奥深さへと通じている。ここで人間は、自身の内に最も深く秘められた本質に従い、自分を創造した存在の根源から立ち現れて私たちと向かい合う。それは、惑星や恒星、そして十二星座の方向づける諸力が人間を組み立てた姿にほかならない。これらの諸力は、音声の中にみずからの文字（しるし）を持ち、文字の中にみずからの封印を持っている。神々によって人間に与えられた言語の枠内で、これらの音声が統合されて響き合うのを私たちが捉えるとき、私たちは新たな意識状態を体験する。そして、これらの意識状態は、過度な知性化（による硬直から私たちを解き放ち、存在の根源へと近づけてくれる。私たちが音声の内に沈潜するとき、私たちは思考をも、その生命を吸い尽くす灰色の脳という包殻から解放することになる。脳は、本来そうあるべき従順で造形的な道具であることをやめ、思考を殺害する吸血鬼と化してしまっているからだ。

私たちが思考を、それを生み出した言語へ、すなわち言語の音声、光と影、色彩、イメージ、脈拍、響きの高低、運動の傾向、深さ・広がり・高さの方向、ゾーン、そしてその塑性的、弾性的、凝縮的、飛躍的な力へと再び連れ戻すなら —— まさにそのとき、私たちは諸世界を体験することになる。私たちがその世界を、自分自身の主観的な体験から切り離し、宇宙の生命へと沈潜させることができればできるほど、その世界はいっそう美しく、豊かなものとなる。狭い感情生活にとどまる私たちの自己が、客観的な宇宙の生命に沈潜することによって把握する豊かさに比べ、いかに貧しく見えることだろう。そして、この把握への道を私たちに指し示してくれるのが言語である。なぜなら、言語の中で私たちは、私たちを創造し、私たちの師であり導き手である神々の力に触れるからだ。人間の内に一つの形態（Gebilde）を創り上げた、あの創造的な諸力に、私たちは触れているのである。」
（『言語造形の本質とメソドロジー』1頁より）

マリー・シュタイナー夫人自身が記述しているその半生において、人類のために霊的な生を求めた彼女は、言葉に携わる活動へと導かれた。マリー・シュタイナーはこのようにして三つの在り方で言葉に「仕え」、自らを言葉の器官へと形成し、三通りの方法で人間に癒やしの力をもたらした。その力は、魂と肉体を霊の表現へと形作るものである。すなわち、言語造形において、オイリュトミーにおいて、そしてルドルフ・シュタイナーの言葉（遺稿・講義録）の編集・出版においてである。

彼女が催した講座、彼女が指導したオイリュトミーの公演、そして彼女の朗唱がもたらした効果に注目してほしい。それは、彼女がルドルフ・シュタイナーに宛てた書簡の中で描写している通りである。いかにして熱意と生きる力が呼び覚まされたか、筆者は戦後のウィーンでその目撃者となった。あの言葉の合唱の公演は忘れがたい。それは単に人々を「感動させた」というにとどまらず、目に見えない現実の「イマジネーション的な体験」を生み出したのである。

言葉の体験へと突き進むこと —— それは、世界の中で作用している本質への参入である。抽象的な「言葉」から、働きかける言葉（ロゴス）へ。聴くことができるということ、それは超感覚的な本質という無限の豊かさが開かれることなのです。そして、生き物から発せられる声の中に、まさにその生き物の魂の中で本質的に、そして実際に働いているものが迫ってくることに気づいた人は、一つの秘密を解き明かされたことになります。その人は、働きかける精神の言葉の生命について、何かを知っているのです。

マリー・シュタイナー夫人の生涯は、過去の発展段階（前世の歩み）の継続としてしか把握できない。むろん、それはすべての人間の一生についても言えることだ。しかしここで私たちが直面しているのは、以下のような形で現れた成熟のプロセスである。マリー・シュタイナー夫人は、様々な人物の人生に現れ、芸術の中に生きることのできる「精神的な現実」を見抜く眼力を備えていた。そればかりか、彼女は霊（精神）と共に生きるために遵守すべき条件を、自分自身の人生の導き手としての条件にまでする術を心得ていた。それらの成熟は、彼女の魂の生活全体、彼女から湧き出るあらゆる活動に織り込まれ、常に新しく生み出され続けた「真実性の力」の中に示されていた。この力なしには、霊と共に、また霊のために生きることは不可能である。さらにその成熟は、ルドルフ・シュタイナーの弟子（Schülerschaft）となり、それを人生の造形へと高めたことから必然的に生じる「敵対関係」を耐え忍ぶ勇気の中にも示されていた。そして、ルドルフ・シュタイナーの全業績のために彼女の全力を文字通り限界まで注ぎ込んだこと —— すなわち、私生活を完全に放棄することを意味するが —— の中にも示されていた。彼女はその犠牲をも、成し遂げたのである。

これまでに述べた事柄を照らし出し、また、このような成熟の境地は決して一つの地上生涯だけで勝ち取れるものではないということを示す、彼女の生涯のいくつかの際立った転換点にのみ、ここでは触れることにする。それらは、霊的な発展の道がそのまま地上の生涯の歩みとなり得ることを示す事実である。

彼女は自身の生涯から、次のような小さな逸話を語ってくれた。まだ小さな少女だった頃、彼女は「宗教とは何か？」という燃えるような問いを内に感じ、夜も昼もその問いに突き動かされていたという。—— その後、彼女はユーモアを交えてこう語った。彼女はあるプロテスタントの牧師の授業に送られ、その第一回目の時間に、この神学者がまさに「宗教とは何か」という問いに答えた。彼は、レリギオン（宗教）という言葉はラテン語に由来し、「結びつき（再結合）」を意味すると言ったのである。—— それは、彼女の魂の燃え盛る炎に冷や水を浴びせるようなものであった。その炎は、もはや表面へ噴き出すことはできなかったが、よくあることであるように、深層でくすぶり続け、情熱的で懇願するような魂の願いへと変容し、後の人生のひとコマにおいて再び現れることとなった。彼女には、後の生涯において、この問いを全く異なる形で立てることが課されていたのであろう。すなわち、「現代人における『神を求める憧れ』は、いかにして満たされ得るのか？」という問いとして。

ロシアの最高峰の学校で教育を受けた後、彼女は内なる至高の欲求から芸術の道へと向かった。詩や演劇芸術の中に精神（霊）を見出そうと試み、言葉の本質を生命へと呼び覚まそうと心血を注いだのである。運命の道は、彼女をパリの朗唱・演劇学校へと導いた。そこはコメディ・フランセーズ（フランスの国立劇団）と密接なつながりを持つ学校であった。コメディ・フランセーズは、精神生活の古い伝統にまで遡る起源を持ち、その厳格な規則の中には、偉大で意義深いものがまだ多く残されていた。しかしながら、マリー・フォン・ジーフェルスには、その内なる本質的な眼力と聴力によって、この薄れゆきつつある伝統芸術もまた、人間の魂を真の霊的生活へと導くことはできないということを見抜く力が備わっていた。この文脈において、エドゥアール・シュレーの著作との出会いは重大な意味を持っていた。何千人もの人々が彼の著作を読み、何千人もの人々が感銘を受けていた。マリー・フォン・ジーフェルスは、シュレーに自らアプローチし、彼の著作をドイツ語へ（マリー・フォン・ジーフェルスはバルト・ドイツ系の出身であった）翻訳させてほしいと願い出る必要性を感じた。これは、真のスピリチュアルな価値を内面的に見抜くことができた彼女の一つの重要な兆候である。

芸術、特に演劇芸術の精神化を模索し、追求する中で、彼女はマリア・シュトラウフ＝スペッティーニという理解に満ちた、教え導いてくれる友人を得た。そして、彼女が言葉の芸術的造形を求める中で、ベルリンのある劇場支配人に面接するよう促されたこともまた、真の兆候であった。この支配人は、マリー・フォン・ジーフェルスの言語芸術と演劇芸術における天才的な才能を見抜き、彼女に名声への道を切り開こうとした。その申し出は輝かしく、見通しは壮大で、成功は確実なものと思われた。ただ支配人は、名声への道を平らにするために味方につける必要があると考えていたジャーナリストたちの好意を得るため、いくつかの「小さな妥協」を受け入れることを彼女に求めた。マリー・フォン・ジーフェルスはすべてを観察し、すべてを聞き —— そして、辞退した。

それから間もなくして、ルドルフ・シュタイナーとの出会いが実現した。これこそが、マリー・フォン・ジーフェルスがカルマ的な人生造形の内なる根源的衝動から目指し、進んできたまさにその人生の局面をもたらすものであった。カルマとは宿命ではない。カルマは打ち破られることもある。カルマは、人が誘惑に屈することによって、完全に変えられてしまうこともあるのである。

ルドルフ・シュタイナーは、ベルリンで自身の人智学を講じていたドイツ神智学協会の運営を引き受ける際、マリー・フォン・ジーフェルスが自身の傍らで共にその活動を担うことを条件とした。それは、彼が自著『わが生涯の歩み』の中で述べているように、霊への道における人間の二大宿敵である「セクト主義」と「感傷癖」を、人智学運動から遠ざけておくためであった。

オイリュトミーが創始されたとき、マリー・シュタイナー夫人はそれを引き受け、さらに発展させていった。ルドルフ・シュタイナーによって与えられた言語造形のための衝動を、彼女は受け入れ、さらに形成していった。そして、シュタイナー自身の証言によれば、「そこから生じたすべてのものは、実に彼女によって初めて、本来の形となった」のである。言葉の合唱と演劇的なものの拡充 —— このことは非常に多くの人々が知らないことであるが —— は、ルドルフ・シュタイナーの逝去後、マリー・シュタイナー夫人によって、私たちがのちに『神秘劇』や『ファウスト』、シラーの戯曲、アルベルト・シュテフェンの戯曲の上演において受け取ることのできたあの高みへと、さらに発展せしめられた。この芸術は、今日に至るまで超えられていない。マリー・シュタイナーが言葉の合唱と共に旅に出た時代を経験し、その合唱がもたらした凄まじい効果を自ら体験できた者は知っている。言葉がそれ自体の本質によって魂の中で作用したことにより、聴衆はイマジネーション的な霊視へと高められ、霊的な現実と一体となる瞬間を生き抜くことができたということを。

そして第三に、マリー・シュタイナーは最初から、書かれた言葉だけでなく、語られた言葉が書き留められた際にも、その言葉を管理していた。これは単にルドルフ・シュタイナーの同意のもとに行われたというだけでなく、むしろ、両者の必要性から生じた行為であった。講義は速記されたが、本質的な問題は、シュタイナー自身が語っていたように、彼にはそれらを見直す時間がなかったということである。速記原稿は往々にして不完全であり、いかなる書き取りにも当然ながら誤りが含まれる。確かに、いくつかの原稿はルドルフ・シュタイナー自身が目を通すことができたが、それは極めて稀なことであった。そのため、この語られた言葉（講義録）の出版を世に送り出すこと、そして、しばしば最良とは言えない出版業者の手に渡っていたルドルフ・シュタイナーの著作の出版を管理することが、マリー・シュタイナーの生涯の使命となったのである。ルドルフ・シュタイナーがマリー・シュタイナーに遺した一律の課題（使命）は、彼の名前が彼の作品（全集）と結びついたままであるように配慮することであった。この使命を深く考える者は、ルドルフ・シュタイナーから発せられたあらゆる活動の成果が、その中に包括されていることを知る。

最後に、マリー・シュタイナーがルドルフ・シュタイナーに対して抱いていた関係性を明らかにする二つの言葉を書き残しておこう。ルドルフ・シュタイナーの生涯に目を向け、彼に立ち向かおうとした反作用や抵抗の諸力を見つめながら、彼女は次のように語っている。

「その楔（くさび）を打ち込もうと躍起になる、激しく黒い悪しき諸力の存在は否定できない —— それらは厳然として存在する。舵を取る力（指導者）が召天されたとき、それらは常に現れる。私たちが守られるのは、自らのあらゆる行動において、次の問いに対して肯定的な答えを持っているときだけである。—— 『その行動は、彼の精神（遺志）にかなっているか？』—— 『彼が私たちに警告した事柄は、遵守されているか？』—— 『ある決定的な転換期において、あらゆる霊的探求者に迫る誘惑は、十分に凝視され、正当に評価されているか？』—— 『世間で一般的であり、霊の戦士にはふさわしくない小手先の手段は、無用なバラ

スト（底荷）として船外へ投げ捨てられているか？』―― 『私たち自身が自分の成熟度や洞察力に対して課す要求は、その課題に応じて高く引き上げられているか？』―― 『それとも私たちは、霊的な未成熟さと、魂としての誕生が未だ完了していない身であるにもかかわらず、傲慢にも運命の決定者、運命の造形者になろうとしているのだろうか？―― しかも、いかなる運命の？ ―― 彼の作品（全集／遺業）の運命の！』」
（マリー・シュタイナー『回想録 Ⅰ』7頁より）

そして、さらなる言葉がある。

「汝自身を知らんと欲せば、世界のあらゆる方向を見渡すがよい。
世界を知らんと欲せば、汝自身の深淵を覗き見るがよい。」

「これこそが、彼の生涯のライトモチーフであった。彼はその証明を提示することに労を惜しまず、人類に遺した霊へと至る教えの道において、単なる瞑想的な手引きや、神秘的な観照の指示だけで満足することはなかった。むしろ彼は、自然科学において正しいと認めた『方法論』に基づいて ―― ただし、自然科学がもたらした個々の結果やその世界観に基づくのではなく、その発展史の理論と研究方法に基づいて ―― 人間の科学を形作り、それを霊の科学（精神科学）へと高めたのである。彼はそれを基礎づけ、拡充し、それによって他の諸科学や実践生活を豊かに実らせた。人類は人智学の中に、かつて神々の思考に支えられ、神聖なる導き手に導かれながら、地上の自我の孤独へと下っていったその道を、今度は『意識の力』によって逆方向へと辿り直す可能性を再び見出すのである。
　この宇宙からの分離があって初めて、人間は外的な世界においても自己を把握する可能性を与えられる。人間の生きる世界時代と発展段階は、これが悟性の活動、意識の開花、そして自我の認識という道を経てなされることを要求しており、それが人間に『自由』をもたらすのである。すなわち、まずは自由の本質に対する理解、次いで愛、そして自由への意志である。人間の内にこの愛と意志を呼び覚ますこと ―― それこそがルドルフ・シュタイナーの試みたことであり、彼が人類のために切り開いた道であった。人類は今、その足でこの道を歩むことができるのである。」
（マリー・シュタイナー『回想録 Ⅱ』32～33頁より）

　ルドルフ・シュタイナーが病床に縛りつけられていたとき、マリー・シュタイナーは広範囲にわたる旅を通じてオイリュトミーを上演し、激動する人類の中へ人智学の衝動を運び届けた。このことについては、彼女がルドルフ・シュタイナーに宛てた報告書や、当時彼が彼女に書き送った書簡が物語っている。それこそが、当時の外なる世界において可能であった、人智学の生命そのものであった。そして彼の没後数十年間にわたり、大規模な年次総会において、言語芸術・音楽芸術セクション（これはマリー・シュタイナー夫人の芸術的作業サークルと同一であった）が果たした尽力こそが、総会を支え、活性化させる要素となった。この事実は、後に彼女と袂を分かつことになる敵対者たち自身も認めていたことである。

　そして、彼女の生涯の歩みの中に、完全に霊的かつ有機的に組み込まれているのが、ルドルフ・シュタイナーが死の直前に彼女に書き残した次の言葉である。

「判断において共に感じ、共に考えることができるのは、やはり私には君しかいない。」
「なぜなら、私の内なるコンペテンス（正当な評価・理解の能力）が認めるのは、やはり君の判断だけだからだ。」

ハンス・W・ツビンデン博士（記）

●C・S・ピヒト
　「マリー・シュタイナー夫人への追悼の言葉」

○基本的な視点

マリー・シュタイナー夫人を、
ルドルフ・シュタイナーの傍らに立ち、彼のために生き、
その仕事に「仕える」形で全うした「仕える女性」として位置づける。

1925年のシュタイナーの逝去後も、
彼の本質の一部は彼女を通じてなお私たちのただ中に留まっており、
1948年12月27日の彼女の帰天は「第二の別れの日」である。

彼女の生涯は、東欧的なスピリチュアルな空気と西欧の文化・芸術を架橋しつつ、
人智学運動の形成・発展・守護に半世紀近くにわたり献身した、
高次の個体性の顕現として描かれる。

○要点

・「第二の別れ」としての意義：

シュタイナーの肉体的な別れ（1925年3月30日）の後も、
彼の本質の一部がマリーを通じて直接的に作用し続けていた。
彼女の死をもって初めて、その別れが完了する。

・23年＋23年の奉仕：

シュタイナーと共に働いた23年間に続き、没後さらに23年間、
彼の遺産を世話・継続し、世界の攻撃から守り抜いた。
晩年まで明晰な精神と責任感をもって、
半世紀近く奉仕したすべてのものの福祉と未来を代表した。

・シュタイナーを「参入者」として見出した認識：

友人エドゥアール・シュレーに対し
「私は一人の参入者を見出しました
――ルドルフ・シュタイナーです」と告げ、シュレー自身もその正しさを確認した。
この出会いが神智学協会ドイツ支部の運営を引き受け、
シュタイナーの総責任者選出と本格的な共同作業の始まりとなった。

・出自と文化的架橋：

バルト・ドイツ系・ロシア生まれで東欧のスピリチュアルな空気に親しみ、
後にドイツ（ライン地方）や西欧の文化・芸術・自然に接した。
当初の「魔法の解けた世界」への当惑を経て、演劇芸術への情熱を抱き、
語学力を活かして中央ヨーロッパを行き来した。
この道は、劇場の門前で一度途切れるかに見えたが、
シュタイナーとの出会いを通じて至高の芸術的完成へと至った。

・共同作業の絶大な寄与：

シュタイナーが世界に分け与えた成果が実を結び成長したプロセスにおいて、
彼女の寄与は強調しすぎることがないほど大きい。
油断のない慈しみに満ちた配慮と、決して屈することのない意志が、
協会の発展の光と影すべてに寄り添っていた。

・芸術的・出版的業績の壮大な道のり：

最初のオイリュトミーの端緒から、神秘劇の上演、
ゲーテ『ファウスト』全編の連日上演、シュプレヒコールの偉業に至るまで。
出版社は小さな小冊子から何百巻もの全集へと発展。
これらのすべてに彼女の形成する意志が貫かれていた。

・最期まで仕える在り方：

死の数日前まで、ルドルフ・シュタイナーの往復書簡集の草稿を自ら朗読させ、
印刷可否を判断するなど、高齢と肉体的苦痛を顧みず使命を全うした。

・精神的な気高さ：

額に「公爵的な要素」が刻まれ、
中世の巨匠たちの彫刻・絵画にその面影が宿るような精神的原像を体現。
火葬の炎は、ゲーテアヌム大火と同じ記念日（12月31日）に
その物理的な面影を連れ去り、
彼女を再び完全な「Geistgestalt（霊的な姿）」へと還した。

○本文

〔カルロ・セプティムス・ピヒト（1887～1954年）は、もともと職業軍人であったが、1920年に軍務を退いた後は、自身の全労働力と多才な能力をひとえにルドルフ・シュタイナーの業績のためにのみ捧げた。1926年には、彼が数年間にわたる収集作業を経て完成させた文献目録『ルドルフ・シュタイナーの著作』が出版された。1931年から1934年にかけては雑誌『人智学（Anthroposophie）』の編集・発行人を務めた。ヒトラー政権によってドイツ国内の人智学の公的な活動が弾圧されると、彼は主要な活動拠点をドルナハへと移した。彼の最も重要な業績の一つに、全13巻に及ぶ『内的な精神的衝動の写しとしての美術史』の編集・出版がある。―― 彼の以下に続くマリー・シュタイナー夫人への追悼の言葉は、彼女の最も近い共同作業者の一人が、直接の生きた体験の中から語ったものであるがゆえに、特別な重みを持っている。〕

ルドルフ・シュタイナーが1925年にその肉体の外殻を去り、地上を歩む偉大なる教師として彼から直接私たちに作用していたものに対して、私たちが別れを告げなければならなかった時、私たちはこの別れを彼の帰天の日付（3月30日）という一点に結びつけて考えていました。しかし今日になって、私たちは初めて次のような事実に気づかされているのかもしれません。すなわち、彼の本質の一部は、未だ直接私たちのただ中に留まってくれていたのであり、あの1948年12月27日（※マリーの命日）は、私たちにとって「第二の別れの日」のようである、ということです。

この突然の帰天が私たちの心を揺さぶり、昨日私たちをここに集わせ、今日もなお短い追悼のために再び結びつけているあの偉大な人格、高次なる個体性は、ルドルフ・シュタイナーの傍らに立ち、彼のために生き、彼のために23年間の歳月を働き続けました。

かつて、彼女の友人であり『偉大なる参入者』の著者であるエドゥアール・シュレに対して、「私は一人の参入者を見出しました —— ルドルフ・シュタイナーです」と、晴れやかな輝きをもって告げたのは彼女でした。そしてその直後、シュレ自身も深く心を動かされながら、彼女のその認識が正しかったことを確認することになります。シュタイナーとの最初の出会いを回想しながら、シュレは自身の印象を次のような言葉で描写しているからです。「私は全く初めて、一人の参入者を目の前にしているという確信を得たのだ」と。——

「23年間というのは長い時間です」、シュタイナー博士夫人は彼の逝去後、その言葉に深い中身を込めてそう書き残されていました。しかし、それと同じだけの期間、すなわち再び「23年間」という歳月が、ルドルフ・シュタイナーの遺産を世話し、あふれんばかりの行動力をもってそれを継続し、彼女の最善の信念に従ってその遺産を世界の攻撃から守り抜くために、彼女に対して授けられることとなったのです。晩年に至るまで明晰な精神を保ちながら、彼女はみずからの責任感に鑑みて正しいと信じるものを、自分が半世紀近くにわたり奉仕し続けたすべてのものの福祉と未来のために、確固たる意識をもって代表しようと努められました。

シュタイナー博士夫人はバルト・ドイツ系の家族の出身でした。彼女はロシアで生まれ、少女時代をそこで過ごしました。彼女は東欧のスピリチュアルな空気をみずからの内に吸い込み、それに親しみ、深く結びついていました。その後、成長した彼女がドイツの地に足を踏み入れ、自身の母親の本来の故郷であるライン川を知った時、魂の中にドイツ・ロマン主義の面影を抱いていた彼女は、西欧からもたらされて古いものを変容させ、即物的なものへと変えてしまっていた多くの事物に対して、最初は当惑せざるを得ませんでした。そこには、当時の東欧（ロシア）とはあまりにもかけ離れた、「魔法の解けた世界」が広がっていたからです。そのことについては、彼女自身が極めて独特な在り方で描写しています。

しかし彼女は、今度は西欧の持つ価値ある側面をも直接体験するようになりました。その文化、その旺盛な活動、芸術や文学の豊かな財産、そして数々の伝説に彩られた大自然の美しさです。彼女の卓越した語学の知識は、中央ヨーロッパのあらゆる国々への道を平らにし、演劇芸術への彼女の情熱は、彼女を芸術生活のただ中へと導きました。演劇の道へみずからのすべてを捧げようとした彼女の意図は、ある意味で劇場の門前において一度は終わりを告げることとなりましたが、それは後に、全く異なる条件（シュタイナーとの出会い）の下で、私たちが全員で体験することのできた、あの至高の芸術的完成へと到達するためのものだったのであります。

その後、神智学協会の土壌においてルドルフ・シュタイナーとの出会いがどのように実現したかについては、彼の自伝『わが生涯の歩み』の中の次のような簡潔な言葉が描写している。

——「私の講義（ブロックドルフ伯爵の神智学サークルにおける講義）に、ある日一人の聴衆としてマリー・フォン・ジーフェルスが現れた。彼女はその後、私の講義の開始後まもなく設立された『神智学協会ドイツ支部』の運営を、確固たる意志をもって引き受けるよう運命によって選ばれた人物であった。」——

この出来事の後に初めてルドルフ・シュタイナーは総責任者に選出されたのであり、こうして、ルドルフ・シュタイナーの業績に対するこの「仕える女性」のたゆまざる共同作業が始まったのである。ルドルフ・シュタイナーが世界へ創造的に分け与えることのできた数々の成果が、いかにして実を結び、成長することができたのか。そのプロセスにおけるシュタイナー博士夫人の寄与がいかに絶大であったかを量るために、私たちはこの共同作業の記憶を、どれほど強調してもしすぎるということはないのである。

私たちが先日、ここドルナハで博士夫人のセクション（言語芸術・音楽芸術セクション）による舞台公演を観劇してから、まだ数週間しか経っていない。その完成された舞台を前にすると、私たちは、あの最初のオイリュトミーの端緒からこのような表現の域に達するまでに、一体どれほど長い道のりを歩まなければならなかったかを、ともすれば容易に忘れてしまいがちになる。

ルドルフ・シュタイナーによる最初の言語的な指示（発声の教え）から、丸一日を要する「神秘劇」の上演や、ゲーテの『ファウスト』全編の連日上演、その他多くの戯曲の演劇的・合唱的（シュプレヒコール）な偉業を可能にするまでに、どれほど遥かなる道を進まねばならなかったことか。マリー・シュタイナーが創設した出版社が、かつて講義ノートから紡ぎ出した最初の小さな小冊子の出版から、それ以降に出版された何百巻もの膨大な全集（全巻）に至るまでに、どれほど遥かなる道が続いていることか。

そして、とっくに人智学協会へと脱皮していたこの協会の発展を共に築き上げ、その栄光の頂点と苦難の底（光と影）のすべてに寄り添い、ルドルフ・シュタイナーの逝去後はその課せられた任務や問題の解決策を模索し、見出していくために、最終的にどれほどの魂の力が要求されたことであろう。そのすべての歩みの中に、シュタイナー博士夫人の油断のない、慈しみに満ちた、芸術を形成する配慮、そして決して屈することのない意志が存在していたのである。

昨日の朝にも、ある書簡から次のような事実が知らされた。彼女の肉体の外殻が崩壊するほんの数日前、ルドルフ・シュタイナーの『往復書簡集』第2巻の草稿が彼女のもとへ発送されていた。彼女はその内容を自身に朗読させ、印刷に回すかどうかの決定を下そうとしていたのである。―― 彼女はその最期の息を引き取る瞬間まで、みずからに委ねられた使命を仕える在り方で全うしようと努め、みずからの高齢やあらゆる肉体的な苦痛を顧みることなく、それを全うされたのだと言うことができる。

シュタイナー博士夫人には、その額に精神の気高き「公爵的な要素」が刻まれていた。中世の巨匠たちによるいくつかの優れた彫刻や絵画の傑作には、彼女の顔立ちの面影が宿っている。このことには、何度でも直面させられる。あたかも、ある精神的な「原像」が、直観的にあちこちの芸術的なファンタジーの前に漂い、巨匠たちの手がそれ何かを捉えて形にしたかのように、あるいは、その精神的原像の完成された形態が、生気に満ちた姿で彼女の内において私たちの前に立っていたかのように ―― もし私たちに、それを捉える機会と「正しい瞬間」が与えられていたなら、そのように見えたことであろう。そのとき、それは輝かしい美しさをもってそこに佇んでいたのである。

そして、解き放つ性質を持ったあの火葬の炎は、本日、この物理的な地上からその面影をも連れ去っていった。―― まさに、あのゲーテアヌムが大火によって炎上した同じ記念日（12月31日）に。今や彼女は、再び完全に「 Geistgestalt （霊的な姿）」へと戻ったのである。

■マリー・シュタイナー
＝フォン・ジーフェルスについて②

・ ヴォルフラム・グロデック：
「マリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルス追悼展
ルドルフ・シュタイナー遺稿管理局アーカイブ展より」

（ルドルフ・シュタイナー全集補遺、およびアーカイブからの公開物
第43/44号 1973年クリスマス（1985年再版）D43_44）

●ヴォルフラム・グロデック：
「マリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルス追悼展
ルドルフ・シュタイナー遺稿管理局アーカイブ展より」
（ルドルフ・シュタイナー全集補遺、およびアーカイブからの公開物
第43/44号 1973年クリスマス（1985年再版）D43_44）

※本文でとりあげられている「追悼展」の画像は収録されていませんが、
そこで展示された歴史的な肖像・舞台写真・美術作品の一部は、
ウェブや関連書籍等で一部確認できるものもあります。

〔訳註：ヴォルフラム・グロデック（Wolfram Groddeck, 1899–1979）：シュタイナーの業績の編集・出版に長年携わった人智学者。に『ルドルフ・シュタイナー全集』（Gesamtausgabe）の編集と、その関連誌『Beiträge zur Rudolf Steiner Gesamtausgabe』（ルドルフ・シュタイナー全集への寄稿）の長年の編集者として知られている。〕

○基本的な視点

マリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルス
（Marie Steiner-von Sivers）の生涯と業績が、
ルドルフ・シュタイナーとの協働・芸術的貢献・編集出版活動の観点から、
没後25周年を記念したアーカイブ展の資料を通じて包括的に紹介される。

彼女を、人智学運動に「言葉」と芸術的要素を導入し、
シュタイナーの霊的認識を現実的・人間的な形で実現可能にした
不可欠の協働者として位置づけ、
その自己犠牲的な尽力に対する感謝と意識喚起が意図されている。

○要点

・展覧会の性格と背景：

1973年、ドルナッハのルドルフ・シュタイナー＝ハルデで開催された
マリー・シュタイナー没後25周年記念展。
肖像写真（幼少期から晩年まで40点以上）、
芸術活動・編集出版の記録、舞台スケッチ、
ウィリアム・スコット・パイルやヤン・ストゥーテンの舞台設計、
アッシア・トゥルゲーニエフの挿画などを展示。
シュトゥットガルトでも再展示された。

・出自と家族：

ホルシュタイン出身のロシア海軍将官の家系に生まれ、
両親はヤコフ・フォン・ジーフェルス（ロシア陸軍中将）と
カロリーネ（ライン地方の医師家系）。
姉オルガは神智学協会ドイツ支部の創設会員で、神秘劇に出演。
両親の葬儀などでシュタイナーとの接点があった。

・芸術的・人間的形成：

ペテルブルクのフェルトマン学院時代から
「若きシラー」と称される明晰さを持ち、
パリで朗誦・舞台芸術を学び、
宮廷女優マリア・フォン・シュトラオホ＝スペッティーニとの
友情を通じて舞台経験を積む。
1902年頃から神智学協会活動に深く関与。

・ルドルフ・シュタイナーとの協働の核心：

言語造形（Sprachgestaltung）とオイリュトミーの育成を通じて、
霊的認識に芸術的要素を導入。
シュタイナー自身が『わが生涯の歩み』で、
「言葉を本来の霊的領域へ回帰させる熱意」を彼女が展開し、
神秘劇上演へと直結したと記述。
1908年10月26日のノヴァーリス講義での初朗誦が重要な起点。

・神秘劇と舞台芸術：

ミュンヘンでのエドゥアール・シュレー作品や
シュタイナーの神秘劇（『秘儀参入の関門』など）でマリア役などを演じ、
主観を排した役との完全な同化を示した。
ミエタ・ヴァラー（のちパイル夫人）らとの協働が目立つ。
カール・ウンガーは、彼女の芸術活動を
「ルドルフ・シュタイナーの著作における真実」の人間的体現と位置づけた。

・オイリュトミーの発展：

名称自体が彼女の提唱による。
コンラート・フェルディナント・マイヤーやシュタイナーの詩、
シェイクスピア『真夏の夜の夢』の妖精場面などで、
シュタイナーとの協働でフォルムを構築・発展させた。

・編集・出版者としての業績：

1905年の『シラーと我々の時代』を皮切りに、
生涯で約500件の出版物を世に送り出す。
哲学・神智学出版社（のち人智学出版社）を設立し、
ヨハンナ・ミュッケを支配人に任命。
シュタイナー没後の『わが生涯の歩み』『真言集』などを刊行し、
講義録に多数の序文を寄せた
（これらは後に著作集にまとめられ、
『わが生涯の歩み』の補完史料とされる）。

・協力者たち：

ウィリアム・スコット・パイ
ル（第二ゲーテアヌムの舞台幕や神秘劇の肖像画・舞台美術）、
ヤン・ストゥーテン
（作曲・指揮・『ファウスト』などの大規模舞台美術）、
アッシア・トゥルゲーニエフ
（著作の装丁・黒板絵の挿画・色ガラス窓）らが、
マリーの庇護・指導のもとでゲーテ精神に基づく芸術衝動を展開した。

・象徴的な記録：

展の締めくくりとして、マリーの手帳の記述
（言語とは運動と平衡の変換であり、
自我・アストラル体・エーテル体の作用が
物理体における「燃焼プロセス」を形成し、
道徳的・宗教的浸透と結びつく）が紹介され、
言語造形の霊的基盤を示す。

○本文

〔本年のルドルフ・シュタイナー遺稿管理局アーカイブ展は、マリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルスの没後25周年を記念して開催された。会場には、各年齢層における多数の肖像写真をはじめ、彼女の芸術的活動やルドルフ・シュタイナー著作の編集・出版活動に関する記録資料が提示された。さらに、シュタイナー自身による舞台スケッチや、マリーの芸術的協力者であったウィリアム・スコット・パイルおよびヤン・ストゥーテンによる舞台設計、さらにはアッシア・トゥルゲーニエフによるシュタイナーの講義録（Vortragswerk）のための挿画なども展示された。
ドルナッハの「ルドルフ・シュタイナー＝ハルデ（Rudolf Steiner-Halde）」にて開催された同展は、夏季、およびその後のミカエル祭の時期に多くの来場者を集めた。これを受け、ノヴァーリス言語造形・演劇学校

の提案により、1973年12月9日から20日にかけて、シュトゥットガルト（Am Bismarckturm 58）に新設された同校の校舎へと移設された。なお、ドルナッハにおいては、12月26日、および12月28日から31日の各日14時から16時にかけて再公開される。〕

ルドルフ・シュタイナーと同様に、マリー・フォン・ジーフェルスもまた、自身の血統上の帰属とは異なるスラヴ系住民の居住地域で生を受けた。彼女の先祖にあたるホルシュタイン出身のピョートル・フォン・ジーフェルス海軍大将は、ピョートル大帝の治世下でロシア海軍を指揮し、皇帝よりリヴォニアの所領を授けられた人物である。

展示品中に肖像がみられる彼女の両親は、ロシア陸軍中将のヤコフ・フォン・ジーフェルス（マリーが15歳の時に逝去）と、ライン地方の医師の家系出身であるカロリーネ（旧姓バウム）である。1912年7月23日にミュンヘンで執り行われたカロリーネの葬儀において、シュタイナーは温かな追悼の辞を述べ、彼女が精神科学（人智学）の諸試みに対して深い関心を寄せていたことを強調した。

両親の肖像の傍らには、オルガ、ヤコフ、ウラジーミルの3人のきょうだいの写真も展示されている。このうちオルガ・フォン・ジーフェルスは、1902年10月20日の創設当日に神智学協会ドイツ支部へと入会した。彼女はミュンヘンにおける『神秘劇』の上演に際してベルデ夫人役を演じたが、第一次世界大戦中にロシア側で救護活動に従事し、その過酷な勤務が原因で1917年に早世した。シュタイナーは、明晰な思考と魂の温厚さが融合した彼女の資質、真実への愛、そして人智学（アントロポゾフィー）への献身について、ベルリン（1917年8月21日）およびドルナッハ（1917年10月7日）での講義の冒頭において詳述している。

形式の正確性を重んじるルドルフ・シュタイナーの姿勢を示す極めて興味深い証左として、1914年12月24日のマリー・フォン・ジーフェルスとの婚姻に際して必要とされた2つの公的文書の、彼の手による謄本が挙げられる。それらは、マリーの出生地であるヴロツワヴェク（Włocławek）の福音派教会が発行した洗礼証明書、およびペテルブルクの聖ミカエル大聖堂が発行した堅信礼証明書である。

40点を超える肖像写真は、4歳当時の記録を起点として、マリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルスの生涯における各期を連続的に示している。なかでもペテルブルクでの在学時代の写真は、すでに彼女の特性を雄弁に物語る。17歳および18歳当時の、理知的かつ明確な目的意識を宿した眼差しからは、当時の校長であったフェルトマン教授（Professor Feldmann）が、彼女を密かに「若きシラー」と称していた理由が自ずと理解されよう。また、この時期の賑やかな集合写真も遺されている。その傍らには、テニスラケットを手に、周囲の歓楽的な様子をどこか面白そうに眺めるマリー・フォン・ジーフェルスの姿が捉えられている。のちの写真のなかには、彼女がエドゥアール・シュレー（Edouard Schuré）に送った2枚の肖像も含まれる。シュレーはこれらの写真に接し、彼女の容貌に対する好意的な解釈を寄せるに至った。なお、1902年2月3日付のシュレーの書簡は、本誌第17号（1967年イースター号）に掲載されている。

19世紀末から20世紀初頭にかけてのこのフランス人詩人（シュレー）の肖像の隣には、マリー・フォン・ジーフェルスと深い宿命的絆で結ばれていたもう一人の人物、マリア・フォン・シュトラオホ＝スペッティーニ（Maria von Strauch-Spettini）の肖像が並ぶ。彼女はかつて、ペテルブルクのドイツ宮廷劇場における宮廷女優であった。マリーより20歳年長であったシュトラオホとマリーとの最初の面識は、1887年の卒業式にまで遡ると推測される。その10年後、フェルトマン学院の記念式典に際して、シュトラオホは『マリア・ステュアルト』の一場面およびフランスの喜劇の演出を手掛けた。この両作品において主役を演じたのがマリー・フォン・ジーフェルスであった。マリーはその前年までの2年間、パリにおいて朗誦および舞台芸術の卓越した高等教育を受けていた。

このように、芸術的協働を出発点とした二人の友情は、1904年12月28日にシュトラオホが没するまで継続した。ウィーンおよびベルリンへの共同旅行は、マリーに舞台女優としてのキャリアを拓く契機となるはずであったが、マリー自身が決定的な一歩を踏み出す決断には至らなかった。1903年の夏、マリーの仲介により、シュトラオホとルドルフ・シュタイナーとの個人的な知遇が成立した。シュトラオホからシュタイナーに宛てられた書簡の中には、1904年7月5日付の彼女の絶筆となった挨拶も含まれている。そこには「先生はあまりにも多くのものを与えられ、決してご自身のことを顧みられません。せめて数週間の静養の時間が先生に訪れますよう、心より願っております」と記されていた。

1914年5月10日にカッセルで行われた講義において、シュタイナーは、シュトラオホが「静かなる情熱」をもって精神科学的真理を受容したこと、ならびに彼女の驚くほど繊細な芸術的理解力について言及している。さらにシュタイナーは、このシュトラオホの「個性」が死後、物理的世界においては潜在するにとどまっていた多くの能力を発展させ、その精神的な援助がミュンヘンでの『神秘劇（Mysterienspiele）』の制作活動へと注ぎ込まれたと述べている。

マリー・フォン・ジーフェルスが、神智学協会（のちの人智学協会）の構築、およびルドルフ・シュタイナーの講義活動の組織化において成し遂げた多大な功績を想起させる資料として、とりわけ1904年から1908年にかけて撮影された3枚の写真が挙げられる。

第一の写真には、1904年の復活祭にスイスへの講義旅行へと赴いた際、チューリッヒ湖近郊の神智学会館（Theosophenheim）の前に佇む二人の姿が収められている。第二の写真は、オイゲーニエ・フォン・ブレドウ（Eugenie von Bredow）の領地であるランディン（Landin）にて撮影されたものであり、同地では

1906年7月29日にシュタイナーによる「リヒャルト・ワーグナーの作品における聖杯の秘密」に関する講義が行われた。そして第三の写真は、1908年8月の連続講義「世界、地球、そして人間」の開催期間中、当時シュトゥットガルトにあった支部（Zweiglokal）の中庭で撮影されたものである。

その他の写真資料は、ルドルフ・シュタイナーの没後の時代に属するものである。そのうちの一枚には、精神科学（人智学）運動の初期においてケルンを中心に目覚ましい成果を上げ、長年にわたり会報（Mitteilungsblatt）の編集・発行を模範的な形で担ったマティルデ・ショル（Mathilde Scholl）とともに写るマリー・シュタイナーの姿がある。また別の写真には、北欧（高緯度北部地域）においてヴァーゲル＝グンナルソン夫人（Frau Wager-Gunnarsson）とともに写る彼女の姿が捉えられている。

ルドルフ・シュタイナーは自著『わが生涯の歩み（Lebensgang）』において、ある特定の時点以降、自身の生涯の記述は人智学運動の歴史から切り離すことが困難になると指摘しているが、この言明はマリー・シュタイナーの生涯の足跡にもそのまま適用され得る。シュタイナーは同著の第34章において、彼女との協働について次のように記述している。

「真の霊的洞察は、本能的とも言える形で『言葉の体験』へと直入する。それは、魂に支えられた母音の響きや、霊的な力強さを帯びた子音の造形へと沈潜し、共感することを学ぶ。そこから、言語発展の謎に対する理解が生まれる。この謎とは、かつて言葉を通じて神霊的本質が人間の魂へと語りかけることができたのに対し、現在の言葉は物理的世界における意思疎通の手段にすぎなくなっているという事実である。
言葉を再びその本来の領域へと回帰させるには、この霊的洞察によって点火された熱意を要する。マリー・フォン・ジーフェルスはこの熱意を展開した。それゆえ、彼女の存在は人智学運動に、言葉と言語造形を芸術的に育む可能性をもたらしたのである。霊界からの伝達という営みに、朗誦および朗読芸術の育成が加わり、これが人智学的な活動の中で催される諸イベントにおいて、次第に重要な比重を占めるようになっていった。
これらの催しにおけるマリー・フォン・ジーフェルスの朗誦は、人智学運動に芸術的要素が導入される出発点となった。なぜなら、これら『朗誦による寄与』から、のちにミュンヘンにおいて人智学講座と並んで上演されるに至る演劇的表現（劇芸術）への発展の間には、一直線の発展軸が存在するからである。
霊的認識とともに芸術を展開することが許されたことによって、我々は現代の霊的体験の真実へとますます深く参入していった。そもそも芸術とは、原初の夢幻的な霊的体験から生成発展したものである。人類の発展過程において霊的体験が後退した時代、芸術は独自の道を模索せざるを得なかったが、霊的体験が新たな形態をとって文化発展のなかに再登場する時、芸術は再びこの体験と合流しなければならないのである。」

カール・ウンガー（Carl Unger）が、マリー・シュタイナーの芸術的活動およびその人間性全体を、「ルドルフ・シュタイナーの著作における真実」と直接的な関連において捉えているのは決して偶然ではない。これは、人智学運動における最も明晰かつ重要な思想家であったウンガーによる論考の題名であり、その中で彼は真実が備える4つの魂の特性として「驚異（Staunen）」「畏敬（Verehrung）」「世界現象との知恵に満ちた調和（weisheitsvoller Einklang）」「世界経過への随順（Ergebung）」を挙げている。会場の解説パネルにも引用されている、ウンガーの論考を結ぶ言葉をここに再現する。

「ルドルフ・シュタイナーの全著作には、彼の新しい芸術の血脈が通っている。そこでは真実が創造的な造形へと昇華されている。オイリュトミー、言語造形、そしてとりわけ彼の神秘劇（Mysteriendichtungen）がなければ、彼の著作は完全な全体を成し得なかったであろう。それら（芸術形式）の中で、真実の本質が人間的な姿を獲得するのである。
『神秘劇』の四つの戯曲（『秘儀参入の関門』『魂の試練』『境界の守護者』『魂の目覚め』）を通じて、マリアという登場人物の姿が変遷していく。彼女は真実の四つの魂の特性を体現して生きており、マリアと他の登場人物との関係性の中に、本質的なドラマツルギーが存在する。彼女は真実の本質として、ベネディクトゥス（Benediktus）の霊的な力を媒介する真の調停者である。彼女の本質は、最初に接する時には真実がそうであるように峻厳である。自己の妄執の中に生きる人間は自らに傷を負うが、その傷は運命を治癒へと導くものである。そして彼女の愛は、諸世界を通じて作用する供物である。彼女の犠牲は、真実の敵対者から勝利をも奪い去る。
第一次世界大戦前、神秘劇の上演においてマリー・シュタイナー夫人（当時はマリー・フォン・ジーフェルス）が演じるマリアの姿を体験した者は、彼女に対して無限の感謝を抱き続けるであろう。なぜなら、彼女の真に比類なき（ kongenial：精神を同じくした）表現を通じて、人生のための真の真理の衝動を獲得することができたからである。今日、マリー・シュタイナー夫人はルドルフ・シュタイナーの芸術の担い手であり、朗誦、オイリュトミー、演劇において形態をとる『言葉』の領域において、それを真に発展させ続けている。このように彼女を通じて、ルドルフ・シュタイナーの著作における生命の血、すなわち言葉の人間的造形における真実が、我々の間で生命を育みつつ作用しているのである。」

歴史的に極めて重要な日付として1908年10月26日が挙げられる。この日、マリー・フォン・ジーフェルスは、ルドルフ・シュタイナーがノヴァーリスの『夜の賛歌』を主題として行った講義において、初めて朗誦を披露した。会場の写真には、フリードリヒ・シャーパー（Friedrich Schaper）の手による同詩人の胸像（オリジナルはワイマールに現存）の前に佇む彼女の姿が収められている。シュタイナーは前述の講義において、この胸像を「18世紀末という時代に、いかに高度な精神的文化が結びついていたかを明瞭に伝える、古典主義時代ワイマールの記録」の一つに位置づけている。写真の傍らには、ルドルフ・シュタイナーおよびマリー・シュタイナーの遺品（遺稿）に含まれていた同胸像の石膏型（レプリカ）が展示されている。

対面の壁面には、ドルナッハ在住の芸術家エリザベト・オーリング＝イェリネク（Elisabeth Oling-Jellinek）の制作による、マリー・シュタイナーのブロンズ胸像が設置されている。この作品は、C・S・ピヒト（C. S. Picht）が前掲の追悼文において記述した、マリー・シュタイナーの面影を想起させるものである。

続く一連の画像資料および解説パネルは、ミュンヘンにおけるエドゥアール・シュレーの演劇作品や、ルドルフ・シュタイナーの神秘劇の上演に関するものである。シュタイナー自身の手による、瞑想室（Meditationszimmer）の設計図や、『境界の守護者』の「テオドーラとストラダーの部屋」に描かれた有翼の獣の壁画原画が展示されている。後者の原画に関し、シュタイナーは次のような指示を遺している。「人間の敬虔（Frömmigkeit）があまりにも巨大であるため、獣はそれによって打たれたように感じ、その血が流れ出す」。

舞台写真には、シュレーの『エレウシス』においてデメテルを演じるマリー・フォン・ジーフェルス、および『魂の試練』の第3景においてミエタ・ヴァラー（Mieta Waller）演じるトマシウスと並ぶマリアとしての姿が捉えられている。さらに、第6景および第7景における修道士役、そして同じく第6景においてミエタ・ヴァラー演じる鉱山技師トマスと共演した同役での姿もみられる。これらの写真からは、マリー・フォン・ジーフェルスが主観的・個人的な要素を完全に排し、役柄と完全に同化してデメテルそのもの、あるいは神秘劇のマリアそのものとして存在していた様が明確に読み取れる。

友人であり芸術的協働者でもあったマリア・エリザベト（ミエタ）・ヴァラー（1883–1954）は、マリー・フォン・ジーフェルスおよびルドルフ・シュタイナーの側近であった。彼女はオランダ人会員として、ミュンヘンで開催された「神智学協会ヨーロッパ支部連合」コングレス（大会）に参加した。このコングレスではシュレーの『エレウシス』が上演され、会場にはシュタイナーの設計による芸術的な内装が施されていた。その体験に強い感銘を受けたミエタ・ヴァラーは、その1年後、ノルウェーにおいてマリー・フォン・ジーフェルスに対し「ルドルフ・シュタイナーの言葉のための神殿を建立したい」との希求を申し出た。1909年から1913年にかけて、彼女はミュンヘンでの演劇上演において、常にマリー・フォン・ジーフェルスの相方として舞台に立った。のちに彼女は、ドルナッハにおける最初期のオイリュトミストの一人となった。

なお、「ヨハネス館（Johannesbau）」から「ゲーテアヌム（Goetheanum）」への改称は、彼女の提唱に端を発するものである。これは1917年にバーゼルで行われた公開講義において、シュタイナーが初めて「ゲーテアヌムという名称が最も好ましい」との意向を表明したことを受けたものであった。また、ミエタ・ヴァラーは小ドームの天井画制作にも携わったが、のちに彼女の提案により、シュタイナー自身が最終的な彩色を行うよう要請されるに至った。1908–09年の冬季から、1924年にウィリアム・スコット・パイル（William Scott Pyle）と結婚するまでの期間、彼女はシュタイナーおよびマリーと寝食を共にする同居人であった。彼女は多方面にわたる貢献のほか、現在の「ルドルフ・シュタイナー＝ハルデ」（当時はブロットベック・ハウスと呼ばれた）の増築部分にあたる、ドルナッハの「オイリュトメウム（Eurythmeum）」の建設資金調達を支援した。マリー・シュタイナーとともに写る2枚の写真資料は1915年のものである。彼女はマリー・シュタイナーの肖像画を2点素描しており、そのうちの1点は本誌の第1面に再現されている。また、彼女は着色された肖像画も制作している。

マリー・シュタイナーによる言語へのアプローチ、およびゲーテ精神に基づく舞台芸術への取り組みを示す証左として、シュレーの戯曲やシュタイナーの神秘劇、『ファウスト』、シラーの『オルレアンの少女』、そしてクラスィンスキ伯爵（Graf Krasiński）の『非神聖喜劇（Ungöttliche Komödie）』における彼女自身の演出台本（Regienotizen）が展示されている。さらに、群読（Sprechchor）用に編曲・構成されたソポクレスの『アンティゴネ』の台本や、1909年に出版されたエドゥアール・シュレーの詩集『新時代の魂（L'Ame des temps nouveaux）』も展示されており、同書には詩人による敬虔な献辞が記されている。

〔オイリュトミーの発展〕

マリー・シュタイナーが1914年を起点として、長年にわたりルドルフ・シュタイナーの創始した「オイリュトミー」にその精力を注ぎ、それを舞台芸術へと昇華させた事実は広く知られている。そもそも「オイリュトミー（Eurythmie）」という名称自体、彼女の提唱に由来するものである。

コンラート・フェルディナント・マイヤー（Conrad Ferdinand Meyer）の詩『聖なる火（Das heilige Feuer）』、ルドルフ・シュタイナーの風刺詩『イニシエーションの歌（Das Lied von der Initiation）』、『オーラフ・アステソンの夢の歌（Das Traumlied des Olaf Åsteson）』、および『泉の奇跡の童話（Märchen vom Quellenwunder）』のオイリュトミー上演に向けた彼女の備忘録（演出ノート）は、シュタイナーが後者の2作品に対して具体的なフォルム（運動形態）を提示する以前の時代にまで遡る。会場にはこれらの資料に加え、オイリュトミストらによって一部作成され、余白にマリー・シュタイナーの手書きの補記が遺されているオイリュトミー・フォルムの写しも展示されている。

この新しい運動芸術の発展におけるマリー・シュタイナーとルドルフ・シュタイナーの協働を示す極めて印象的な事例として、シェイクスピアの『真夏の夜の夢』の諸場面におけるオイリュトミー表現の構築が挙げられる。「妖精の歌（Elfenlied）」「妖精とパック（Elfe und Puck）」「子守唄（Lullaby）」は、すでに1922年の段階でオイリュトミーのプログラムに組み込まれていた。その後、1923年のヨハネ祭（夏至祭）に

際して、より包括的な構成での上演が行われた。1924年10月のオイリュトミー巡回公演の最中、マリー・シュタイナーは未完であった残りの妖精の場面のために、さらなるフォルムの提示をシュタイナーへ要請している。会場には、当時の往復書簡に同封されていたレクラム文庫（Reclam）の小冊子も展示されている。ルドルフ・シュタイナーが、その仕事上および生涯の伴侶に対して抱いていた深い結びつきは、彼女に捧げられた一連の「真言（Wahrsprüche）」の中にも表現されている。会場には、1916年の誕生日の真言のうち、手帳に記された最初期の草稿（初稿）も出品されている。

本展には、自らの人間性のすべてを傾けてゲーテ精神に基づく芸術衝動（goetheanischer Kunstimpuls）に尽力した、二人の芸術家の業績も組み込まれている。一人は1973年2月13日に没後35年を迎えたウィリアム・スコット・パイル（William Scott Pyle）であり、もう一人はマリー・シュタイナーと同じ年である1948年の2月25日に霊界へと旅立ったヤン・ストゥーテン（Jan Stuten）である。

来場者に提示されている資料は、これら二人の芸術家が生涯に成し遂げた業績のほんの一部分にすぎない。しかしながら、その展示を前にする時、当時ルドルフ・シュタイナーとマリー・シュタイナーの庇護（指導）のもと、精神的な理念世界へと自己を無私に捧げ、いかに豊かな芸術的創造性が活動していたかという事実に、深く思いを馳せざるを得ない。

〔ウィリアム・スコット・パイルの創作より〕

パイルが制作した第二ゲーテアヌムの舞台幕のための図案は、先に言及したミエタ・ヴァラー＝パイル（Mieta Waller-Pyle）によるマリー・シュタイナーの素描画と同様に、チューリッヒのヘルマン・ホイプトリ＝リュッシャー（Dr. Hermann Häuptli-Lüscher）夫妻からの借用資料である。パイルのこの仕事は、1914年にルドルフ・シュタイナーが第一ゲーテアヌムの（のちに実現されなかった）舞台幕のために描いたスケッチを基礎としている。来場者に向けて、そのモチーフは以下のように説明される。

すなわち、ゲーテの断片詩『秘密（Die Geheimnisse）』におけるマルクス兄弟の遍歴が、『童話（Märchen）』のイメージ群、すなわち「神殿（＝第一ゲーテアヌム）」、および「渡し守のいる川」（ギリシア神話におけるカロン、古代エジプトにおける「後方を顧みる者」）と結びつけられている。画面左手には、植生が乏しく死に瀕した「死の岸辺」が描かれ、その対格には、霊的な営みが織り込まれた生命を宿す景観が表現されている。この景観から、道は上方へと続いており、ゲーテが『秘密』の解説（1816年）において「一種の理念的なモンセラート（Montserrat）」と称した聖なる精神の地へと至る。

マリー・シュタイナーの委託を受け、パイルは妻のミエタ・パイル＝ヴァラー（Mieta Pyle-Waller）とともに、第三および第四神秘劇の舞台美術を設計した。彼はラファエロの作品やノヴァーリスの現代的な肖像画をもとに、神秘劇の観客には広く知られている、エライアス（Elias）、ヨハネス（Johannes）、ラファエロ、ノヴァーリスの肖像を制作した。これらは『境界の守護者』の冒頭の場面で使用されるものである。こうした絵画資料は、1912年にミュンヘンで行われたシュタイナー演出による初演当時から、すでに舞台装置の一部として組み込まれていた。これについては、本誌所収の論考「マリー・シュタイナーとルドルフ・シュタイナーのノヴァーリス研究」を再度参照されたい。

マリー・シュタイナーは、週刊誌『ゲーテアヌム（Goetheanum）』の会報において、50歳を前にして早世したパイルに対し、以下の追悼文を寄せている。

「最も生産的な芸術的創作のさなかから、W・スコット・パイルは召天した。まだ50歳にも満たない年齢であった。ハーグでの作品展が大成功を収め、それに伴って多くの優れた依頼が彼のもとに舞い込んだ矢先、長年病を患っていた彼は重病に陥り、手術を余儀なくされた。しかし、それを克服するだけの身体的余力は、もはや彼には残されていなかった。
スコット・パイルは情熱の霊（Feuergeist）であり、その創作活動は彼自身を燃やし尽くすものであった。仕事に取り組む時、彼はあらゆる物事を忘却した。市民生活における通常の生活リズムは彼にとって存在しなくなり、食事、飲料、睡眠による肉体的エネルギーの補給さえも忘却した。彼はただ、自らの芸術的ヴィジョンの中に生き、その痩身で筋張った身体から力が注ぎ込まれる、表現の手の中にのみ生きていた。
彼はシュタイナー博士および人智学に出会う以前から、すでに画家として一般社会で評価を確立していた。しかし、彼は祖国での活動を放棄してドルナッハに留まり、我々とともに最も過酷な運命の打撃を分かち合い、可能な限りの援助をあらゆる場面で提供した。そして自身の絵画技法を完全に転換させ、シュタイナー博士が絵画の領域に与えた示唆や新たな衝動のすべてを具現化しようと邁進した。
彼は博士から特別な任務として、新しい植物絵具の製造を委託されており、これに不眠不休で取り組んでいた。すでに極めて光に満ちた色彩のニュアンスを実現することに成功していたが、彼は耐久性の面において、さらにそれ以上の成果を常に追求していた。米国における大恐慌は、彼の色彩研究所『アンテア（Anthea）』の広範な操業に一時的な停滞をもたらしたが、その活動が完全に途絶えることはなかった。より精力的な操業が可能となる好転の時期を待ちつつ、静かに研究に基づいた開発が継続されていた。
しかし、彼の健康状態は悪化し、南部（最初はイタリア、のちに米国のコロンビア、アリゾナ、ニューメキシコ）での療養を必要とした。数ヶ月の予定であった米国滞在は、結果として4年間に及んだ。祖国との絆が再び彼を強く捉えたが、彼の目的は、あくまでその複製の成果をゲーテアヌムのために役立てることにあった。
ミカエル祭の直前に彼が当地（ドルナッハ）に到着した際、最初に着手した仕事が、博士の提示したモチーフに基づくゲーテアヌム大ホールの舞台幕の制作であった。そのキャンバスはすでに数年間丸められたま

ま保管されており、制作のために確保されていた『アンテア』の絵具とともに彼の帰還を待っていたのである。舞台美術の功労者であるネメッツ氏（Mr. Nemetz、チューリッヒ）の協力を得て、舞台幕はわずか10日足らずで完成し、ミカエル祭の祝典において我々に驚きをもたらした。その効果は強烈であり、かつ持続的なものであった。ここに、シュタイナー博士が遺した遺訓が再び実行に移されたのである。これはスコット・パイルの遺作（別れの贈り物）であり、今や我々にとって彼を偲ぶ記念碑となった。
　これが必然の帰結であったという事実を、我々は未だ容易には受け入れ難い。多くの壮大な作業計画が控えており、彼はそのために十二分な準備を整えていたからである。過剰なまでの生命エネルギーが、その物理的肉体を消耗し尽くしてしまった。そもそも彼にとって、地上の肉体はあまりにも鈍重な存在であった。彼の献身もまた、燃えるように全きものであった。ルドルフ・シュタイナー、その芸術、そして妻と娘に対して、彼の広大な愛が注がれていたのである。」

〔ヤン・ストゥーテンを記念して〕

　オランダ生まれのヤン・ストゥーテン（Jan Stuten, 1890–1948）は、作曲家、指揮者、舞台美術家、そして俳優として卓越した業績を遺した。彼はドルナッハのみならず、数々の演奏旅行において指揮者として精力的に活動した。彼の音楽的業績はゲーテの『ファウスト』への付随音楽において頂点に達している。彼はルドルフ・シュタイナーのための追悼音楽（2本のチェロを含む弦楽五重奏曲）を作曲したほか、エディス・マリオン、グラフトン海軍大将、カール・ウンガー、ヘルマン・ピヒト、ウィリアム・スコット・パイル、オットー・レルヒェンフェルト伯爵、ケーテ・ミッシャー、イタ・ヴェグマン、ゾフィー・シュティンデなど、世を去った多くの友人たちの葬儀のための音楽を手掛けた。また、その他の祝祭やオイリュトミーのためにも多数の楽曲を制作したほか、ゲオルク・トラークルの詩などに曲をつけている。

　彼の天才的な舞台美術の領域からは、『ファウスト』第一部の「大斎原（書斎）におけるプードルの場面」「隣人の家」「グレートヒェンの家の前の通り」、および「古典的（ロマンチック）ワルプルギスの夜」からの2場面、さらに第二部における「メネラオス宮殿」、第五幕第二景（豪華な舟）、そして最も強烈な視覚的効果をもたらす「埋葬」の舞台図案（デッサン）が出品されている。これらの資料は、彼の息子であるクリスティアン・ストゥーテン（Christian Stuten）の厚意により、本展に提供されたものである。

　マリー・シュタイナーのもとでゲーテアヌム舞台の技術監督を務め、同時に俳優および群読（スプレヒコール）のメンバーとしても芸術的に活動したヴェルナー・タイヒェン（Werner Teichen, 1900–1955）は、自身がフリッツ・ヴェルシング（Fritz Wörsching）と共同で編集した冊子『イン・メモリアム・ヤン・ストゥーテン（In Memoriam Jan Stuten）』（ドルナッハ、1949年刊）の中で、ストゥーテンの舞台美術について次のように記している。

「1928年の春、ゲーテアヌムの指導部によって、同年秋のミカエル祭にゲーテアヌム新館（第二ゲーテアヌム）を開館することが決議された際、プログラムの中心に据えられたのは、ルドルフ・シュタイナーの最初の2つの神秘劇『秘儀参入の関門』および『魂の試練』の上演であった。1910年および1911年にミュンヘンで行われた初演時の舞台装置は、1922年から23年にかけての大晦日の夜、第一ゲーテアヌムとともに火災によって焼失していた。したがって、1928年の段階における課題は、計画された上演のためにすべてのデザインを刷新し、新たに制作することであった。
　ヤン・ストゥーテンはいち早く率先して行動を起こし、これら両戯曲のために、神秘劇の内容にふさわしい壮大な精神を宿した図案を作成した。彼は比類なき不屈の精神をもって、この巨大な作業を遂行する過程で次々と生じる膨大な劇的・舞台技術的課題のすべてに取り組んだ。
　中でも最大の業績は、『ファウスト』第一部および第二部の総合演出（全編上演）の完遂であり、そのためには45面におよぶ舞台背景の製作が必要とされた。さらに、ゲーテの『パンドーラ』、シラーの『メッシーナの婚約者』『オルレアンの少女』『マリア・ステュアルト』、そしてエドゥアール・シュレーの『エレウシスの聖劇』にいたるまで、長年にわたりストゥーテンの図案に基づく舞台装置が制作された。彼の最後の仕事――重病に倒れる直前の作業――は、ゲーテの『タウリスのイフィゲーニエ』のための舞台背景のスケッチであった。
　また、ゲーテアヌムで上演されたアルベルト・シュテフェン（Albert Steffen）の戯曲のほぼすべての演出において、ストゥーテンは詩人（シュテフェン）のスケッチに基づき、模型の作製から最終的な舞台装置の完成にいたるまでを監督した。
　ヤン・ストゥーテンとの協働は常に刺激に満ちていた。芸術的および技術的な問題を議論する際、彼は常に、その舞台にとって最も有益となる観点を第一義に据えていた。ストゥーテンはその造形能力において極めて独自のスタイルを持つ芸術家であったが、より優れた洞察に対して耳を傾ける柔軟性を欠くことは決してなかった。結論として、彼とともに一つの舞台作品の演出に取り組んだことは、常に大きな収穫をもたらすものであった。」

　ストゥーテンに対する最も美しい賛辞は、前述の記念冊子の緒言に寄せられたマリー・シュタイナーの次の言葉に見出される。

「ヤン・ストゥーテンはもういない。最も忠実な協働者の一人であり、ルドルフ・シュタイナーの仕事と著作に自らのすべてを捧げた、我々の最も才能豊かな作曲家であり舞台美術家、あらゆる芸術に対して心を開いていた人物であった。出生においてはオランダ人であったが、いかなる国民的制約をも持たない真の意味での『地球市民』であり、それ以上であった。すなわち、宇宙的（惑星的）な生命の中で織りなし、夢見、創造し、そしてルドルフ・シュタイナーを感謝と驚異の念に満ちた謙虚さで見上げていた存在であった。」

〔編集・出版者としてのマリー・シュタイナー〕

ルドルフ・シュタイナーの著作（遺稿）に対するマリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルスの編集・出版活動は、それ単体としても類稀なる先駆的業績である。彼女が最初に手掛けた出版物として、1905年4月に『シラーと我々の時代（Schiller und unser Zeitalter）』が刊行された。これは、フリードリヒ・シラー没後100周年に際してシュタイナーがベルリンの「自由高等学院（Freie Hochschule）」で行った連続講義を、マリーとヨハンナ・ミュッケ（Johanna Mücke）が筆記（速記）したものである。この事実には、マリーとシラーとの精神的な深い結びつきを示す象徴的な意味を読み取ることができよう。彼女はこの書の序文においてエドゥアール・シュレーについて詳細に言及し、シラーと同様にシュレーにとっても芸術とは自己完結した自己目的ではなく、「理想への、そして外部の現実がその屈折した微かな反映にすぎないような真実への、教育者であり先導者」であると述べている。1905年5月13日付のシュレー宛ての書簡の中で、彼女はこの文脈に関連して、「素材を形式（フォルム）によって超克すること、これこそが巨匠の本来の芸術である」というシラーの言葉を自らのものとして引用している。

会場には、1908年10月26日にシュタイナーとマリーが初めて共同で開催した「ノヴァーリス・マチネ（朝の会）」の講義録（筆記原稿）や、二人による第二回ノヴァーリス記念会の印刷校正刷り（マリー・フォン・ジーフェルスによる手書きの修正指示入り）も展示されている。さらに、シュタイナーがマリー・フォン・ジーフェルスに自らの遺産の管理・運用を委ねた、手書きの遺言書（委任状）の一つも閲覧に供されている。

シュタイナーの没後、最初の2つの出版物が早くも1925年中に刊行された。それらは、ミエタ・ヴァラー＝パイルが装丁を手掛けた『わが生涯の歩み（Mein Lebensgang）』、および『真言集（Wahrspruchworte）』である。後者は、シュタイナーが『魂の暦（Seelenkalender）』のために描いた図案に基づく装丁がなされ、マリー・シュタイナーによる手書きの序文原稿を伴っている。マリー・シュタイナーが生涯に世に送り出した出版物は、総計で約500件にのぼる。彼女はその膨大な連続講義録の多くに序文を寄せた。これらの序文は、彼女の著作集第1巻『ルドルフ・シュタイナーの人智学（Die Anthroposophie Rudolf Steiners）』（ドルナッハ、1967年刊）にまとめられているが、これらは広範な精神史的展望を提示すると同時に、人智学運動の歴史という観点において、周知の通り1907年の出来事の記述で中断しているシュタイナーの『わが生涯の歩み』を補完する一級の史料として評価され得るものである。

ヨハンナ・ミュッケ（1864–1949）の存在の中に、マリー・シュタイナー＝フォン・ジーフェルスは価値ある忠実な協働者を見出していた。ミュッケは19世紀末から20世紀初頭にかけて、自身が理事を務めていた労働者教育学校（Arbeiter-Bildungsschule）の講師であったシュタイナーとすでに知り合っていた。1908年8月1日、マリー・フォン・ジーフェルスはベルリンに「哲学・神智学出版社」（1913年以降は「哲学・人智学出版社」）を設立し、出版実務の経験を有していたヨハンナ・ミュッケを支配人（業務執行責任者）に任命した。ミュッケはこの職務を1935年まで遂行した。会場の写真には、1923年にドルナッハへと移転した同出版社の社内において、70歳の誕生日を迎えた彼女の姿が収められている。

〔アッシア・トゥルゲーニエフを記念して〕

マリー・シュタイナーは、ルドルフ・シュタイナーの著作における装丁および芸術的意匠の創出を、アッシア・トゥルゲーニエフ（Assia Turgenieff, 1890–1966）へと委ねた。トゥルゲーニエフは、第二ゲーテアヌムの建設に際して、シュタイナーが提示したモチーフを新館の色ガラス窓（ステンドグラス）へと移植した人物である。彼女が手がけた第一ゲーテアヌムのガラス窓の版画（エッチング）の複製は、マリー・シュタイナーの編集によるポートフォリオ（図版集）に彼女自身の解説文を付して収録された。また同様に彼女のテキストを伴う形で、1961年にルドルフ・シュタイナー遺稿管理局から出版されたポートフォリオ『ゲーテアヌムのガラス窓のためのルドルフ・シュタイナーの図案』にも収められている。

40年余にわたり、トゥルゲーニエフはシュタイナー著作の装丁を担当し、本文中における彼の黒板絵（黒板スケッチ）を再現するための挿画を制作し続けた。この挿画には、彼女がシュタイナーの直接の指示に基づいて開発した、新しいハッチング（陰影木版画風の線画）技法が用いられている。黒板絵の持つ固有の特徴を、印刷テキスト用の挿画の文体へとどのように変換・融和させたかというプロセスは、2点の黒板絵オリジナルと、それに該当する講義録テキスト内の図版との比較によって実証的に示されている。

さらに彼女は、マリー・シュタイナーの委託を受け、明暗のコントラスト（キアロスクーロ風の構成）による表現を用いて、ゲーテの『童話』、シュタイナーの『芸術の本質（Wesen der Künste）』、および『泉の奇跡の童話』のための挿画を制作した。これら3作品はいずれも大型の記念版として刊行されている。会場には、後者の2作品のために描かれた彼女のオリジナル原画17点が展示されているほか、以下の各巻のタイトル装丁に向けた彼女の図案とその実物が並ぶ。

- 『ゲーテ研究とゲーテ精神に基づく思考法（Goethe-Studien und goetheanische Denkmethoden）』

- 『ゲーテの生涯に即した人間の職業のカルマ（Das Karma des Berufes des Menschen in Anknüpfung an Goethes Leben）』

• 『一般人智学協会の設立に向けた1923-24年のクリスマス会議（Die Weihnachtstagung zur Begründung der Allgemeinen Anthroposophischen Gesellschaft 1923-24）』

• 『中世の神秘の場。薔薇十字思想と現代の参入原則（Mysterienstätten des Mittelalters. Rosenkreuzertum und modernes Einweihungsprinzip）』

このほか、1936年にジャック・フォルジェ（Jacques Forget）によって描かれた彼女の肖像スケッチも展示されている。なお、1973年10月16日は、この芸術家の没後7周年の命日にあたる。

〔マリー・シュタイナーの手帳より〕

締めくくりとして、ドルナッハの展覧会において多くの来場者の注目を集めた、マリー・シュタイナーによる記録をここに再現する。その内容は、1923年における霊学者（シュタイナー）の示唆に基づいて深められたものである。記述は以下の通りである。

「言語とは、人間における運動と平衡（バランス）が変換されたものである。
我々は、思考波の持つエーテル的なものを、言語を媒介するより粗大な空気の波動の中へと注ぎ込んでいる。

人間を直立させるのは『自我（Ich）』であり、その直立した存在の中で言語感覚へと働きかけるのは『アストラル体（Astralleib）』であり、すべてを思考力によって貫くのは『エーテル体（ätherischer Leib）』である。これらはすべて、物理的肉体（physischer Leib）の中へと作用している。

人間において、自我、アストラル体、エーテル体の内部で生じている諸状態は、物理的肉体においては一つの『燃焼プロセス』を形成している。

人間における燃焼プロセスは、動物のそれとは全く異なっている。

有機的生命の炎が水平方向に作用する場合、それは良心から生じるものを破壊する。人間の内部においてその炎が良心によって貫かれているという事実は、人間における意志の炎が地球に対して垂直に立っているということに起因する。

子どもは、外部的な平衡状態の獲得へと移行するのと全く同様に、この道徳的な領域の参入へと移行していく。

歩行を学ぶこと（Gehenlernen）によって、人間の内部には道徳的な人間本性、否、宗教的な浸透（充実）までもが奔流となって流れ込むのである。

思考世界が持つ理想主義を通じて、我々は睡眠中に、かつて我々がそこから発展して離脱してきた諸世界へと赴く。それは、地上において人間として思考を学ぶためである。

他者の魂へと寄り添い、その他者へと参入していく理想主義的かつ好意的な心情（Gesinnung）は、アストラル体に対して大天使の近傍へと到達する力を与え、同時に言語に心地よい響きをもたらす。これに対して、利己的な心情は、この力をアーリマン的な元素霊の世界へと霧散させ、人間を非人間化へと導く。

人間はその内面において精神的（霊的）な存在であるという意識に根ざした、人間愛に満ちた姿勢は、我々を大天使の近傍へと近づける力を与えてくれる。これがない場合、該当する諸力はアヒマン的な元素霊の世界へと分散してしまい、我々は人間本来の本性から疎外されることになる。」

本展覧会の背景にあった意図は、マリー・シュタイナーの比類なき生涯の業績について、可能な限り包括的な洞察を提供することであった。これにより、単に感謝の念を表明するにとどまらず、この偉大なる人物が、ルドルフ・シュタイナーの人類のための活動を可能にするために、いかに自己犠牲的な尽力を重ねてきたかという事実に対する意識を喚起せんとしたものである。

ヴォルフラム・グロデック（Wolfram Groddeck）

■マリー・シュタイナー
＝フォン・ジーフェルスについて③

・ ヘラ・ヴィースベルガー
「マリー・シュタイナーとルドルフ・シュタイナーの
ノヴァーリス研究
シュトゥットガルトの
「ノヴァーリス言語造形・演劇芸術学校」における、
マリー・シュタイナー没後25周年記念講演」

（ルドルフ・シュタイナー全集補遺、およびアーカイブからの公開物
第43/44号 1973年クリスマス（1985年再版）D43_44）

〔訳註：ヘラ・ヴィースベルガー（Hella Wiesberger, 本名：Helene Anna Wiesberger, 1920–2014）：ルドルフ・シュタイナーの全集（Gesamtausgabe）の編集・刊行に半世紀近く携わった中心人物の一人。マリー・シュタイナーの死後、遺稿管理局（Rudolf Steiner-Nachlassverwaltung）とアーカイブでその意向を引き継ぎ、特に秘教的な業績の公開とマリー・シュタイナー研究に大きく貢献した。〕

○基本的な視点

マリー・シュタイナーが、ルドルフ・シュタイナーのノヴァーリス研究
――「ノヴァーリス＝ラファエロ＝ヨハネ
（洗礼者／福音記者）＝エリヤ」の「赤い糸」――において果たした、
個人的・カルマ的役割を超えた「客観的な歴史を形作る」意義を示す。

人智学運動の誕生（1901–02）からゲーテアヌム開館（1920）、
1924年の「最後の演説」に至るまで、
マリーの「運命の問い」と高次の芸術的直観・言語造形が、
キリスト教的神秘認識の開示、霊的経済の法則（輪廻転生の高次の章）、
人類の霊的指導の継続性を可能にした共同作業として位置づけられる。

伝統の継続性という秘教的最高法則と、
言葉（ロゴス）の復活が中心テーマとなる。

○要点

・ノヴァーリス研究はシュタイナーの業績を貫く「赤い糸」。
マリーの示唆により、輪廻転生の光の下で
人類の霊的指導の歩みが理解可能になった。

・第一の結節点（1901–1902）：
神智学活動の端緒。
マリー（当時フォン・ジーフェルス）の問い
（「よりヨーロッパの精神生活に合致し、キリスト衝動を考慮した提示は不可能か」）が、
ヨハネ福音書の独自解釈と『神秘的事実としてのキリスト教』を呼び起こし、
ドイツ支部設立の基礎となった。人智学運動の誕生の瞬間である。
ラザロ＝ヨハネ、エリヤの再現への示唆がすでに現れている。

・第二の結節点（1908–1909）：

共同のノヴァーリス記念会（『夜の賛歌』『マリアの歌』朗唱など）。
マリーの芸術的体験（ラファエロの絵画が鍵となりノヴァーリスが透明になる）を契機に、
ノヴァーリス＝ラファエロ＝洗礼者ヨハネ＝エリヤの
転生関係が初めて開示される（1909年1月6日、公現祭）。
同時に「霊的経済の法則」
（自我だけでなく他の構成要素が異なる個体性へ再受肉する）の記述が始まり、
菩薩・第五の福音書研究への道を開く。

・第三の結節点（1911–1912）：

アニー・ベサントとの対立を背景とした霊的指導者講義群（ゾロアスターからキリストまで）、
神秘劇（特に『境域の守護者』第1景で4肖像を背景にヒラリウスが登場）、
劇場計画、人智学協会設立時のノヴァーリス記念会。
四重の先駆者としての役割が強調され、公開された神秘の聖所の理念が表現される。

・第四の結節点（1920）：

ゲーテアヌム実質開館。
マリーがヒラリウス演説の改訂版
（「私たち」から「私」へ、公開された聖所に対応）を朗唱。
建築の内面的生命（霊的キリスト教）をノヴァーリス系譜の個体性に結びつける。

・第五の結節点（1924年「最後の演説」）：

ミカエル祭前夜。
ノヴァーリス＝ヨハネ＝ラザロに捧げられ、初期研究と結びつくが未完。
二人のヨハネの交錯・結合
（洗礼者ヨハネの個体性がラザロと結びつき「主が愛された弟子」となる）が謎として残る。
霊的経済の法則が原理的解明の鍵。
マリーの回想と速記原稿の注記により重要性を知る。

・マリーの役割の本質：

高次な芸術的直観（霊的観照）がシュタイナーの啓示を支え、
言語造形芸術を通じて「神秘の家・言語の家」で蘇ったロゴスにふさわしい発声様式を創出。
ノヴァーリスを特別な教育者とした。
命日（12月27日＝福音史家ヨハネ記念日）、火葬日（12月31日＝第一ゲーテアヌム大火と同日）、
没後25年が最後の演説から49年（7×7）であることなど、カルマのしるしとして読まれる。

・全体の真髄：

秘教の最高法則「霊的伝統の継続性の維持」。
シュタイナーは外的にゲーテと、
内的にキリスト衝動の先駆者（ノヴァーリス＝ラファエロ＝ヨハネ＝エリヤ）と結びつけた。
エミール・ボックの言葉
「ルドルフ・シュタイナーの全生涯の業績は、
言葉（ロゴス）の復活というサインの下に立っている」を踏まえ、
マリーの共同奉仕がその実現を支えた。

○本文

―― ノヴァーリスの周囲には、私たちの最も美しい記憶が織りなされている。

……輪廻転生（再受肉）の思想の光に照らされた、人類の霊的指導の歩み。決して表面に開示されているわけではないこの認識を私たちが得られたのは、マリー・シュタイナーによる確かな示唆のおかげである。ノヴァーリス研究における彼女の役割は、単に個人的・運命（カルマ）的なものにとどまらず、それを遥かに超えて、人智学運動の文脈において「客観的な歴史を形作る」ほどの意義を持つものであった。

1924年の聖ミカエル祭の前夜に行われた、ルドルフ・シュタイナーの「最後の演説」を偲ぶ論文の中で、彼女は自身とノヴァーリス研究との個人的な結びつきについて報告しており、その中で次のような道標となる言葉を残している。すなわち、ルドルフ・シュタイナーはその一連の講演活動を、彼の知恵の啓示を通じて「あたかも一本の赤い糸のように貫いていたもの ―― ノヴァーリス、ラファエロ、ヨハネの神秘」をもって締めくくった、という言葉である。

「あたかも一本の赤い糸のように貫いていたもの……」。私たちはこの赤い糸の結節点（ジャンクション）を探し、マリー・シュタイナーがそれとどのように結びついていたかを検証してみよう。

最初の結節点は、1901年から1902年にかけての冬学期、ルドルフ・シュタイナーが精神科学的な教職活動を開始したまさにその端緒に見出すことができる。当時 ―― それはノヴァーリスの没後ちょうど丸一世紀が経過した時であった ―― 彼はベルリンの神智学徒たちの前だけでなく、文学サークル「ディ・コメンデン（来るべき者たち）」の世俗の子ら（文化人たち）の前でも、後に彼がキリスト教の「弁明」あるいは「正当化」と呼ぶことになる講義を始めた。それは、ラザロ＝ヨハネ問題に端を発する「ヨハネによる福音書」の独自の解釈を通じて行われた。

神秘の認識（参入認識）からキリスト教を新たに解き明かすというこの開幕の試みは、その直後に『神秘的事実としてのキリスト教』という著作として出版され、シュタイナー自身の言葉によれば、ドイツにおける神智学の諸力を結集させる中心軸となった。これによって初めて、神智学協会のドイツ支部設立の真の基礎が築かれたのである。そして、支部の指導者の地位を打診された際、彼は当時まだマリー・フォン・ジーフェルスであったマリー・シュタイナーが自身の共同作業者となることを条件として初めて、それを引き受ける決意をしたのであった。―― これこそが、人智学運動の誕生の瞬間であった。

しかし、マリー・シュタイナーがこの最初の結節点において、これほどまでに歴史を形成する形で結びつくことができた前提条件とは、一体何であったのだろうか。

ルドルフ・シュタイナー自身、後にこのことについて、ベルリンの「労働者教育学校」の時代から親交のあったヨハンナ・ミュッケに語っている。ミュッケの報告によると、あるときドルナハの「ハウス・ハンシ」の庭で、シュタイナーは彼女に当時のことを次のように語ったという。

「『……当時、本当に最初の頃、神智学運動に関心を持つ人々の中から、彼（シュタイナー）自身が語るべきことを聴きたいと望む何人かの人々が集まってきた時のことです。シュタイナー博士は、当時マリー・シュタイナー夫人が彼に対して、これらの知恵を、よりヨーロッパの精神生活に合致した形で、かつキリスト衝動を考慮に入れた上で提示することは不可能でしょうか、という問いを投げかけたのだと説明されました。この回想に、彼は私が決して忘れることのない次の言葉を添えられたのです。―― 「それによって私には、自分が思い描いていた方向性で活動する可能性が与えられた。問いは私に投げかけられ、霊的な法則に従って、私はそのような問いに対して答えを与え始めることができたのだ」』」

マリー・シュタイナーのこの「運命の問い」によって呼び覚まされ、キリスト教的な神秘認識への門の封印が解かれたのである。では、自然科学とテクノロジーの時代においてますます理解されなくなっていったキリスト教の「弁明」は、どこから着手されたのだろうか。それは「ヨハネによる福音書」の執筆者をめぐる秘密から、すなわちマリー・シュタイナーが言う「ノヴァーリス＝ラファエロ＝ヨハネの神秘という一本の赤い糸」から始まったのである。

当時ルドルフ・シュタイナーは、新たに伝達されるべきキリスト教への理解を、このヨハネという人物像と深く結びつけようと考えていた。そのため、直後の1904年夏には「ヨハネ協会」あるいは「ヨハネ福音書部門」の設立についてさえ言及しており、その任務は、ヨハネによる福音書にいかに汲み尽くし得ない深遠さが横たわっているかを広範な人々に知らしめることにあった。

1904年7月18日の講義録には、そこで何を求め、何を学ぶべきかを知る者は「心からこのヨハネ福音書部門に加わるがよい」と記されている。それに先立つ7月11日にはすでに、神智学協会の胎内から「通常の意味では持たれていないような、キリスト教の真の理解をもたらす運動」が生まれ出ようとしている、という指摘がなされていた。これに続いてルドルフ・シュタイナーは、ヨハネ福音書のプロローグ（序言）である「初めに言（言葉）があった……」から「恵みと真実とに満ちていた」までの箇所について、彼自身による最初の翻訳を提示した。

さらに彼は、1904年7月18日および25日の講義において、著書『神秘的事実としてのキリスト教』は歴史的な資料を一切考慮せずに執筆されたものであり、ただアカシャ年代記という超感覚的な源泉のみに依拠していること、そしてアカシャ年代記の記録によれば、ヨハネによる福音書の執筆者は「主が愛された弟子」、すなわちキリスト・イエス自身によって秘儀参入を授けられた「ラザロ」であるという事実を明確にした。

そして、ルドルフ・シュタイナーがほぼ同時期に、福音書自体の中でも「洗礼者ヨハネの中にエリヤが再現した」と指摘されていることに注意を促しているため、私たちはすでに最初の結節点の時代において、二人の「ヨハネ」という人物像への示唆を見出すことができる。これら二人の謎めいた結びつきは、それから何年も経った後、ルドルフ・シュタイナーの「最後の演説」によって初めて開示された（あるいは本来開示されるべきであった）ものであり、彼が帰天される少し前の個人面談において、「これら二人のヨハネという人物像をめぐる問いは、将来的に極めて重大な意味を持つようになるだろう」と言い残したとされる事柄である。

第二の結節点は、最初の結節点から7年後、1908年から1909年にかけての年の変わり目に現れる。1908年10月にベルリンで開催されたドイツ支部の第7回総会の際、ルドルフ・シュタイナーとマリー・シュタイナーは共同で、最初の「ノヴァーリス記念会」を形作った。それは広義の、そして特にヨハネによる福音書の意味における「言葉（ロゴス）」への共同の奉仕から生み出されたものであった。マリー・シュタイナーはノヴァーリスの『夜の賛歌』を朗唱し、ルドルフ・シュタイナーは彼の個性の像を展開させ、ワイマールにある素晴らしい胸像（彼らに友人からその鋳型が贈られたもの）へと人々の注意を向けさせた。

その2ヶ月後の1908年のクリスマスに、二人の共同による第二回目のノヴァーリス・イベントが行われた。ルドルフ・シュタイナーは「霊視者としてのノヴァーリス」について語り、マリー・シュタイナーはこの時は『マリアの歌』を朗唱した。そして、マリー・シュタイナーによれば「その数日後」、この文脈において極めて重大な意義を持つ出来事が起こる。ルドルフ・シュタイナーが、ノヴァーリスの個体性がかつて精神史の中でどのように作用していたかを初めて明らかにしたのである。すなわち、中世においては偉大な画家ラファエロ ―― 「最後の演説」の中で彼が「世界の画家」と呼んだ存在 ―― として、時代の転換期（紀元前後）においては「洗礼者ヨハネ」として、そしてユダヤの古代においては大預言者「エリヤ」として生きていた、という秘密である。

それは1909年1月6日、今度はミュンヘンで開催された第三回目の共同ノヴァーリス・イベントでのことであった。暦の上では、この1月6日は「公現祭（三王礼拝の祝日）」であるだけでなく、キリストの顕現の日、すなわち「ヨルダン川での洗礼の日」として祝われる日であるため、この1月6日という日付自体も、暦の上

で間接的にこの偉大な個体性を想起させるものであった。このミュンヘンでの講義については速記（講義録）が残されておらず、当時の参加者による短い回想の描写が残されているのみである。その参加者は当時、深い感銘を受けながら次のような光景を目にし、耳にした。—— ルドルフ・シュタイナーがノヴァーリス、ラファエロ、洗礼者ヨハネ、エリヤの転生の結びつきについて語った後、マリー・シュタイナーが「ラファエロの絵画の色鮮やかな複製画に囲まれて、ノヴァーリスの詩を朗唱していた」のである。

私たちが今日、この重大なカルマ的開示（ノヴァーリスの秘密）をもたらす背景となった出来事を知ることができるのも、冒頭で触れたマリー・シュタイナーの回想録のおかげである。その中で彼女は次のように報告している。

「それは、ルドルフ・シュタイナーが私に対して、もっともっと朗唱の活動を表舞台で行うよう励ましてくれていた時期のことでした。当時、私はノヴァーリスの詩の世界へと自らを突き動かそうと試みていました。しかし私は彼に、それが容易ではなく、ノヴァーリスの魂へ至る鍵がまだ見つけられないのだと打ち明けました。彼は私に、『聖なる修道女たち』の心情の中に身を置いてみるよう助言してくれました。ですが、修道女たちは私を助けてはくれませんでした。それどころか、彼女たちをどう捉えればよいのか、さっぱり分からなかったのです。その時、にわかに目の前が明るくなりました。ラファエロの絵画の姿たちが、私の周囲に立ち現れたのです。その幼子は、宇宙のように深い眼差しを湛え、母の腕の中で輝いていました。——〈千もの絵の中に、あなたを見る、マリアよ、愛らしく表現された……〉。周囲には響き渡る宇宙の海、そして色彩の調和が広がっていました。

私はルドルフ・シュタイナーに言いました。〈修道女たちは駄目でした。けれど、別の人が助けてくれました。ラファエロです。今や私にとって、ノヴァーリスは完全に透明（不可思議ではないもの）になりました〉。ルドルフ・シュタイナーの穏やかな面持ちに、一筋の輝きが走りました。その数日後、彼は私たちに、あの『ノヴァーリス＝ラファエロ＝ヨハネ＝エリヤの秘密』を初めて明かしてくれたのです。」

今日の私たち人智学運動の歴史を見つめる者にとって、マリー・シュタイナーがこの体験を後世に書き残してくれたことの意味は極めて大きい。なぜならそれによって、ルドルフ・シュタイナーにとって、マリー・シュタイナーの高次な芸術的直観の能力 —— 彼女の内で本物の「霊的観照」の高みへと舞い上がることのできたその能力 —— が、いかに多大な意味を持っていたかを量ることができるからである。だからこそ、彼が帰天直前の書簡（1925年2月27日）の中で彼女に宛てて「私の内なるコンペテンス（正当な評価能力）が認めるのは、やはり君の判断だけだ」と書き残した理由も理解できる。さらに、自伝『わが生涯の歩み』の中で次のように述べられている通りである。「私たちは、霊の認識と共に芸術を展開させていくことが許されたことによって、現代の霊体験の真実の中へと、ますます深く成長していったのである。」—— すなわち、この「言葉（ロゴス）」をめぐる共同の歩みこそが、私たちが「ノヴァーリス研究」と呼ぶ霊的秘密の解明における、第二のステップの背景を形作っていたのである。

さて、この第二の結節点には、霊学研究（精神科学研究）におけるもう一つの重要なモチーフが絡み合っている。ノヴァーリスという個体性の転生関係が提示されたのと同時に、当時ルドルフ・シュタイナーが「輪廻転生の教えにおける高次の章」と呼んだ内容の記述が始まったからである。すなわち、人間の「自我」という永遠のエンテレケイアが再受肉するだけでなく、人間の持つ「他の構成要素（エーテル体やアストラル体など）」もまた再受肉し、しかも —— ここが決定的なのであるが —— 「他の異なる個体性の内へと」入り込む、という事実である。

これこそが、人類の発展史において霊的・精神的に価値あるものを保存するための「霊的経済の法則」である。それは、いわばより高次なレベルにおける、特定の構成要素の複雑な再受肉プロセスであり、個々の人間の発展においてだけでなく、人類全体の発展およびそれを導く霊的指導との関連において生じるものである。そして、ルドルフ・シュタイナーの全業績の年代記的な構築の中に横たわる法則性に違わず、ノヴァーリスという個体性の転生関係から出発したこの「霊的経済」をめぐる考察は、同時に、偉大な人類の指導者たちである「菩薩」という壮大なテーマや、私たちが『第五の福音書』として知る、あの胸を打つ研究成果への手引きともなっている。なぜなら、これらすべての霊学研究の根底には、まさにこの霊的経済の原則が横たわっているからである。

しかし、1908年から1909年にかけての年の変わり目に、こうした微細で精妙な再受肉の関係性が初めて具体的に描写されるのに先立ち、その少し前にはすでに、それに伴う「理解の困難さ」についての予備的な示唆が見られる。たとえば、1908年9月の連続講義『エジプトの神話と神秘』において、それは特に顕著である。その第10講の中で、歴史上のブッダに言及しながら次のように語られている。

「では、ブッダとは本来何だったのでしょうか。私たちはここで、精神科学の弟子たちの間でしか語り得ない事柄に触れなければなりません。人々は、たとえ神智学徒であっても、通常、再受肉の秘密をあまりにも単純に考えすぎています。今日、ある三つの身体（肉体・エーテル体・アストラル体）の中に肉体化しているどこかの魂が、単純にその前世に存在し、さらにその前に存在し、その前にもまた……というように、常に同じ図式に従って進んでいくなどと考えてはなりません。その秘密ははるかに複雑なのです。H・P・ブラヴァツキーが、その親しい弟子たちに対して、これらの秘密がいかに複雑であるかを示しようと多大な労力を費やしたにもかかわらず、今日でもそれは未だ正しく理解されていません。人々は単に、一つの魂が何度も何度も一つの身体に入っていくのだと考えています。事態はそれほど単純ではありません。私たちは、ある歴史

的な人物を正しく理解しようとする場合、しばしばそのような単純な図式に当てはめることができないのです。私たちはそこでは、多くの場合、はるかに複雑な方法で取り組まなければならないのです。」

「霊的経済の法則」が持つ再受肉の教えにおける「高次の章」としての根本的な意義が、1924年のカルマをめぐる考察ほどには未だ知られていないとすれば、その主な理由は、ルドルフ・シュタイナーがそれについて1908年から1909年にかけての最初の数回の講義で示唆するにとどまったからである。そしてこの意義は、数年前まで未だ出版されていなかった諸講義をまとめた全集『再受肉の諸問題に関連せる霊的経済の原則（Das Prinzip der spirituellen Ökonomie im Zusammenhang mit Wiederverkörperungsfragen）』によって、初めて真に明白なものとなったのである。

もしルドルフ・シュタイナーが、1924年9月のカルマをめぐる一連の講義を終えた後もさらに講義を続けることができたなら、彼は1924年のカルマ講義を構築したときと全く同じように、人類の霊的指導に関連させて、霊的経済の領域における研究をも確実に体系的に継続していたであろう。なぜなら、彼がまさにあの「最後の演説」の中で示唆し、さらに進めようとしていた内容こそは、事実上、この領域への「新たな始まり」としてしか理解できないからである。

このようにして、ルドルフ・シュタイナーのノヴァーリス研究における「第二の結節点」を、私たちは1908年から1909年にかけて、マリー・シュタイナーとの精神科学的・芸術的な共同作業の中に、そして人類の霊的指導に関するアカシャ研究の極めて本質的な章としての「霊的経済」との結びつきの中に見出したのである。

続く「第三の結節点」は、1911年から1912年にかけての時期に見出される。しかもそれは、三つの要素が複雑に絡み合った形をとっている。第一に、当時の神智学協会会長アニー・ベサントとの対立、およびそこから生じた「ドイツ支部」の人智学協会としての独立という歴史的背景。第二に、ミュンヘンでの（のちの第一ゲーテアヌムへとつながる）建築計画。そして第三に、『神秘劇』の上演である。

まず、1911年から1912年にかけての協会内部の状況との関連から見てみよう。アニー・ベサントとの対立 —— すなわち、彼女が公に主張していたキリストの「肉体的な再臨」の教えや、キリストを「菩薩」という存在とみなす彼女の見解をめぐる確執 —— は、当時まさに最高潮に達しつつあった。これに対してルドルフ・シュタイナーが —— これもまた公の場で —— 対置したのが、人間の「人類の霊的指導」に関する一連の大講義であった。彼は1911年1月にベルリンで「ゾロアスター」に関する講義からこれを開幕し、1912年1月には「キリストと20世紀」という講義をもってこれを締めくくった。その間には、偉大なる霊的指導者であるヘルメス、ブッダ、モーセに関する講義が横たわっている。

次いで、1911年6月のコペンハーゲン講義がある。これはまさに上述の理由（アニー・ベサントとの対立による人智学の立場明示の必要性）から、早くも同年8月には『人間と人類の精神的指導（Die geistige Führung des Menschen und der Menschheit）』という著作として出版された。それはまさに、第二の神秘劇『魂の試練（Die Prüfung der Seele）』の初演の最中のことであった。この劇の中では「菩薩の問題」が、今度は芸術的・超感覚的な方法で扱われ、「マリア」のカルマの謎を通じて表現されている。

その直後の1911年9月、ルドルフ・シュタイナーはジェノヴァで開催される神智学大会へと向かう旅の途上で（この大会はアニー・ベサントとの公式な直接対決の場となるはずであったが、寸前で中止となった）、近代西欧の霊的指導者としての「クリスチャン・ローゼンクロイツ」に関する最初の講義を行った。
さらにこれに内的な一本の線で結ばれる形で、同じくベルリンにおいて、この多事多難であった1911年の掉尾を飾る12月のドイツ支部「最後の総会」の期間中に、私たちの今日の考察において特に不可欠な「精神科学の光に照らした預言者エリヤ」に関する講義が行われた。なぜなら、あの困難極まる菩薩の問題に対して極めて重要な解明をもたらす「エリヤの霊」と、その地上における担い手であった「ナボテ」との関連を、ルドルフ・シュタイナーが初めて公開の場で描写したのが、まさにこの講義であったからである。1911年12月14日のこの「エリヤ講義」の翌日には、クリスチャン・ローゼンクロイツと結びついた「神智学的な芸術と様式のための協会」を設立する試みがなされた。この二つの出来事の時間的な交錯は極めて本質的である（たとえその協会設立の試み自体は実現に至らなかったとしても）。

※〔訳註：「エリアとナボテ」旧約聖書の『列王記上』第21章に登場する、預言者エリヤと、ぶどう畑の持ち主であったナボテという人物に関する有名なエピソード（「ナボテのぶどう畑」事件）のこと〕

そしてその1年後の1912年のクリスマス、ケルンにおいて「人智学協会」が設立された際、この記念すべき機会に、再び共同での「ノヴァーリス記念会」が催された。その冒頭でルドルフ・シュタイナーは早くも、ノヴァーリスがキリストの使命について告げているその在り方の中に、「私たちの人智学運動の正当性（Rechtfertigung）」を感じ取ることができるはずである、と人々の注意を促した。このことから、ルドルフ・シュタイナーがいかに強く、ノヴァーリスという個体性を人智学という霊的潮流と結びついたものとして捉えようとしていたかが明白になるのである。

「第三の結節点」と、劇場建築計画および神秘劇とのさらなる関連は、ミュンヘンにおける劇場の定礎式が、そもそも1912年2月27日に最初の予定として組まれていたという事実から明らかになる。これが当局の許可をめぐる困難によって実施不可能となったため、再び5月16日へと予定が変更された。

そして、まさにこの1912年5月という月に、あのノヴァーリス＝ラファエロ＝ヨハネ＝エリヤという個体性がキリスト・インパルス（キリストの衝動）をもたらした「四重の先駆者（ Heroldschaft ）」としての役割に関する大いなる記述が、再び行われるのである。すなわち、5月2日にベルリンで、5月8日にケルンで、そして1912年5月16日にはミュンヘン —— つまり、現地で定礎式が執り行われるはずであったまさにその当日 —— において講義がなされた。ミュンヘンで計画されていた「あの建築」の定礎式という背景なしには、ルドルフ・シュタイナーがなぜ1912年のこの5月の数日間に、あたかもそれまで一度もそのことについて語ったことがないかのように、突如としてこの四重の先駆者について再び語りだしたのか、その理由は理解できないであろう。

たとえミュンヘンでの定礎式は実施できなかったとしても、同年8月の第三の神秘劇『境域の守護者（Der Hüter der Schwelle）』の初演の際、まさにその第1幕（第1景）において、あの建築衝動の根底にあるもの —— すなわち、近代的な、換言すれば『公開された神秘の聖所（Mysterienstätte）』を創設するという理念 —— が表現されることとなった。このドラマは、ある部屋の中で12人の人物が語り合っている場面から始まる。ルドルフ・シュタイナーの舞台指示（ト書き）によれば、その部屋はある神秘結社の諸室へと続く前庭として想定されている。12人の人々は、その結社から呼び集められたのである。それは、「ヨハネス・トマシウス」が彼自身の偉大な科学的業績によって前提条件を創り出したことで、未だ秘儀伝授を授かっておらず、それゆえ今までは『ここに神秘的に響き渡る言葉（ロゴス）を聴くことを許されなかった』ような人々であっても、その聖なる場所に参集することができるようになった後のことであった。

1912年にミュンヘンでこの『境域の守護者』の第1景が演出された際、ルドルフ・シュタイナーは結社の諸室へと通じる扉の壁に、エリヤ、洗礼者ヨハネ、ラファエロ、そしてノヴァーリスの肖像である「4枚の絵」を掲げさせた。後年、ゲーテアヌムでこれらのドラマが新演出で再演されることになった際、マリー・シュタイナーはウィリアム・スコット・パイル（William Scott Pyle）に依頼して、これらの絵を新しく描き直させた。そして、パイルの手によるこれらの絵は、今日でもドルナハにおける『境域の守護者』の上演の際に使用されている。

1938年にパイルが急逝した後、マリー・シュタイナーはこれら4枚の絵の複製画（添付図版を参照）を収めたポートフォリオ（画集）を出版した。そこには、エドヴィン・フローベーゼ（Edwin Froböse）による次のような情緒に満ちた4行詩が添えられていた。

追悼のために　あなたはそれらの絵を創り給うた
今度は私たちが　あなたを追悼するためにそれを持ち寄る
生命の回帰の中で　それらの本質を
霊視せしあの人を　想起しつつ

1911年から1912年にかけてのこの結節点において、ルドルフ・シュタイナーの全業績におけるノヴァーリス研究の中心的意義は、特に明白なものとなる。もし私たちが、そこに宿る目に見えない霊的な精妙さを感じ取ることができるならば。—— すなわち、『境域の守護者』の第1景において、エリヤ＝ヨハネ＝ラファエロ＝ノヴァーリスの4枚の肖像画を背景に、大導師ヒラリウスが、これまで隠されていた聖所の奥からいわば世界の公衆の前へと姿を現し、次の言葉を語る瞬間に立ち会うときである。

わが聖所において魂たちにみずからを告げ知らせる
あの霊の御名において、私たちは今この瞬間、
これまで、ここに神秘的に響き渡る言葉を
聴くことを許されなかった人間たちの前に、姿を現す……

—— そして、このことはヒラリウスの演説のその後の展開の中で、太古の初めから現代に至るまでの一連の人類の霊的指導の段階、ならびに「真にそうであるところの」あらゆる神秘学校の精神的な継続性を根拠として論証されていくのである。

さらに付け加えるなら、1912年8月の『境域の守護者』の初演の直後には、同年9月にバーゼルで行われた「マルコによる福音書」に関する連続講義が直接続いていた。この講義は、主に「エリヤという存在」に捧げられたものとして感じ取ることができる。そしてその中では、エリヤの時代よりもさらに前に遡る前世への示唆もなされている。運命の導きによって、まさにこのバーゼルでのマルコ福音書講義に関連して、ドルナハの丘がゲーテアヌムの建築用地として提供されるに至ったことは広く知られている通りである。

その1年後、ドルナハでの定礎式の際、ルドルフ・シュタイナーは初めて「第五の福音書」について語り、そこからクリスチャニア（現オスロ）やその他の場所での同テーマに関する講義へと続いていった。それらの講義の中では、エリヤ＝ヨハネの姿が再び大きな空間を占めているだけでなく、その秘密を解くためのいわば鍵として、まさに「霊的経済の法則」が機能しているのである。

この流れは、その内的な性質において第三の結節点とほとんど一つに絡み合っている「第四の結節点」によって、さらに高められることになる。この第四の結節点は、1920年の聖ミカエル祭の時期に訪れる。ドルナハでの7年間にわたる集中的な建築作業を経て、ゲーテアヌムが最初の高等学術連続講座（※自由精神科学高等学院の講座）と共に幕を開けた時である。当時、建物は未だ完成していなかったため、これが公式な開館式となったわけではなかったが、実質的にはその使命へと委ねられたのである。

ルドルフ・シュタイナーは、この厳かな開館の行為を、人智学運動の共同創設者であるマリー・シュタイナーの朗唱（Rezitation）によって開始させた。彼女は共同創設者として、パイプオルガンのバルコニーから、この建築の二つの円蓋空間（Kuppelräume）へと向かって声を響かせた。当時、ルドルフ・シュタイナーが彼女に語らせたのは、一体いかなる言葉であっただろうか。それは他でもない、あの『境域の守護者』の第1景において、4枚の肖像画の前で大導師ヒラリウスが語ったあの演説であった。ただし、ゲーテアヌムの開館のために改訂されたバージョンにおいてである。

ヒラリウスが語っていた「私たち（Wir）」という形式は、ルドルフ・シュタイナーの文学作品においては極めて稀であり、ゆえにこの文脈においては特に重大な意味を持つ「私（Ich）」という形式へと変換されていた。そして、ヒラリウスの演説の中で『これまで隠されてきた神秘の聖所』を指し示していた内容は、今や、公開された神秘の聖所としてのゲーテアヌムの性質に対応するものとなっていた。そのことは、すでに最初の数行に表現されている。

わが思索の場所において魂たちにみずからを告げ知らせる
あの霊の御名において、私は今この瞬間、
これから先、ここに厳粛に響き渡る言葉を
聴こうと欲する人間たちの前に、姿を現す……

これら二つのバージョンの演説を個別に互いに対比させてみることは、それ自体が極めて示唆に富んだ研究となる。マリー・シュタイナーの80歳の誕生日に寄せて、フェーベ・コラッツァ＝アレンソンがこのような対比を試みており、それは1952年に『今日、そしてここで（Heute und Hier）』という題名の小さな複製品として発行され、1965年には雑誌『人智学への葉片（Blätter für Anthroposophie）』に再び転載された。

さて、私たちは、ルドルフ・シュタイナーのノヴァーリス研究における「第五の、そして最後の結節点」を考察しなければならない。すなわち、「最後の演説」である。ルドルフ・シュタイナーが1924年9月28日のミカエル祭の前夜に、集まった友人たちに向けて最後に行うことができたこの演説は、それだけでもすでに重大な意味を持っているが、同時に、彼の1901〜1902年のノヴァーリス研究の「始まり」とこの「終わり」とを一つに結びつけるものでもある。なぜなら、この演説はその内容のすべてが「ノヴァーリス＝ヨハネ＝ラザロという個体性」に捧げられているからである。そして、この結びつきがシュタイナーによって完全に意識的に遂行されたに違いないということは、彼自身が自著『神秘的事実としてのキリスト教』へと（演説の中で）立ち返って言及していることからも読み取ることができる。

それにもかかわらず、この最後の演説は、ノヴァーリス研究の本当の意味での締めくくりを意味してはいない。なぜなら、この演説には依然として、大きな「理解の困難さ（謎）」が結びついたままだからである。すなわち、それ以前の描写においては、ヨハネに関する言及は常に「洗礼者ヨハネ」であった。—— この最後の演説のように「ヨハネ＝ラザロ」ではなかったのである。このことは、当時の聴衆にとって大きな謎の問いとなった。

今日では、ルドルフ・シュタイナーが翌日にこの演説を継続するつもりであったことが知られている。しかし、彼の体力はもはやそれに耐えることができなかった。もし語られていたなら、その与えられることのなかった「第二部」こそが、まさにこの問いを解明するはずだったのである。今日、私たちがこの件について知っているのは、様々な訪問者、そして何よりも彼の二人の主治医 —— イタ・ヴェーグマン博士とルートヴィヒ・ノル博士 —— の問いに対して彼が語った言葉のみである。1973年に出版された『カルマの開示 Ⅳ』の改訂版には、これらの補足的な指示が追加された。

それらの記述から明らかになるのは、キリストによる復活の際にラザロが授かったあの参入を通じて、「もう一つの個体性」が彼と結びついたということである。それこそが、あの「洗礼者ヨハネ」の個体性であった。したがって、私たちはここで「二つの個体性の結合、あるいは交錯（Durchkreuzung）」に直面しているのである。そして、この洗礼者の個体性がラザロの個体性と結合して初めて、あの蘇らされたラザロは「主が愛された弟子」となり、福音書記者となり、黙示録記者となったヨハネへと変容したのである。

マリー・シュタイナーはこのことについて、1925年9月の回想論文の中で次のように報告している。

「私たちは、ありとあらゆる異なる観点から、何度も何度も彼（あのノヴァーリス＝ラファエロ＝ヨハネ＝エリヤの秘密）のもとへと引き戻されていきました。その最後にして最も重く、なぜなら『もう一つの個体性の線によって交錯されていた』がゆえに最も困難であった秘密を、彼はあのミカエル祭の前夜に私たちに与え —— そして途絶してしまったのです。—— 彼は、その講義を本来彼が意図していたところまで進めることができませんでした。彼は私たちに、ラザロの神秘の第一部を与えてくれました。当時、彼は私に口頭で語っただけでなく、後に最初の速記原稿の封筒に次のように書き記しました。—— 『私がこれに第2部を付け加えるまでは、他人に渡してはならない……』と。
今や、彼がこの第二部を私たちに与えてくれることはもうありません。再受肉と霊化（一時的随伴）の秘密、すなわち個体性たちの交錯のただ中から、正しいものを見分けることは、ひとえに私たち自身の『認識の力』へと委ねられているのです。」

この問題（※二人のヨハネの謎）を、具体的にではないにせよ、少なくとも原理において解明してくれるのが、ルドルフ・シュタイナーがそれより何年も前に提示していた、再受肉の教えにおける「高次の章」としての、また人類の霊的指導の原則としての「霊的経済の法則」の描写である。

そこに「エリヤ＝ヨハネという存在」がいかに根づいているかについては、すでに40年以上も前、シュトゥットガルトにおいて長年にわたりルドルフ・シュタイナーのもとで人智学の事業のために尽力した一人の男によって入念に導き出されていた。すなわち、アドルフ・アーレンソンが1931年にシュトゥットガルトとドルナハで行った「エリヤ＝ヨハネ＝ラザロ」に関する講演においてである。それはかつて一度複製されて発行されたものの、今ではもう長い間絶版となっている。

アドルフ・アーレンソンはその中で、自身の長年の研究の成果として次のように総括していた。―― 地球進化の尊い意味に鑑み、ゴルゴタの丘における「愛の犠牲（キリストの十字架）」に先立ち、人類の中に「自由の種子」を組み込むことが不可欠であった。そしてそれは、ラザロの復活によって遂行されたのである、と。

「『……ラザロの蘇生において、キリストによって一つの行為が成し遂げられた。それは、神々の中で最高位の存在（キリスト）にしか遂行し得ないものであった。それは ―― あらゆる秘教の法則に忠実に ―― 古代の参入へと結びつきながらも、同時に、未来の人間が他者や神の助けを借りることなく霊的世界を勝ち取ることができるような、あの自由の根源的な芽生えをすでにその内に宿した参入であった。……ラザロの出来事は、地上の人間に対して執り行われた、自由の芽生えをその内に宿す“最初の参入”を意味している。この参入は、参入者を、その参入の後であっても他からの影響から独立した自由な状態に留めるのである』」

このことから、次のようなことが理解できるはずであると彼は言う。

「『キリストが共にこの参入を遂行したあの人物が、いかに高い成熟の段階に達していなければならなかったかということを。……そして私は思考の中で、あの高次な神の行為を正しく受け取るに足る成熟を一体誰が備えていたのか、キリストの周囲にいたあらゆる人物像を見渡してみた。私は、ただ一人の存在しか見出すことができなかった。それこそが、その内にエリヤ＝フィネハス、エリヤ＝ナボテ、洗礼者ヨハネを秘めていたあの個体性、すなわちエリエ＝ヨハネ（Elias-Johannes）であった。……そして私は理解した。この存在は、洗礼者ヨハネの死後、弟子の霊的な圏域に留まり、グループ・ソウルのように彼らの上空を漂いながら、待っていたのである。キリストが（イエスの肉体・エーテル・アストラルの）諸外殻を鍛え上げ、第七のしるし（ラザロの蘇生）へと至るまで高めるのを。そうして、ラザロの身体の内にエリヤ＝ヨハネ＝ラザロとして入り込み、キリストの行為を受け取り、そして“主が愛された弟子”として蘇るために。

これによって、私個人にとっては、それ以来私たち全員を悩ませ続けてきたルドルフ・シュタイナーの最後の言葉の謎は解けたのである。……なぜなら、洗礼者ヨハネとラザロは同一の存在であり、フィネハスから洗礼者ヨハネ、ラザロを経てノヴァーリスに至る全転生の系譜を通じて、エリヤの霊こそが本質的に作用していた核心であったということを、私は目の当たりにしたからである。そして、あの畏怖すべきエリヤの霊による数千年間にわたる準備の活動が、キリスト自身による参入によってその戴冠を迎えたのだと知った時、私は深い畏敬の念に満たされたのである……』」

アドルフ・アーレンソンの記述はここまでである。

さて、私たちは今日の考察から、一体いかなる本質的な真髄を導き出すことができるだろうか。それは次のようなものである。―― あらゆる秘教の最高法則、すなわち「霊的伝統の継続性を維持すること」に忠実にあり続けること（これはヒラリウスの演説の二つのバージョンにおいて、芸術的・マントラ的な形態へと高められていた）。ルドルフ・シュタイナーが、外的な科学においてはゲーテに結びつき、それゆえあの建築を「ゲーテアヌム」と名づけようとしたのと同じように、彼は、この建築の内面において生きるべき「精神的な生命の血、すなわち霊的なキリスト教」については、あの個体性へと結びつけたのである。その個体性とは、精神史における四つの生涯において、キリスト衝動の先駆者として、人類のためにまさに同じ奉仕の活動を担った存在であり、それはシュタイナー自身が人智学を通じて行った奉仕の在り方そのものであった。

伝統の継続性を維持するというこの法則に従い、彼は初期において神智学協会にも結びついたのである。なぜなら、マリー・シュタイナーがかつて書いているように、神智学協会は「輪廻転生とカルマの教えを世界に広めることをみずからの任務とみなしていた」からである。――「彼自身、すでに存在していた精神的な遺産に結びつき、それを生き生きと維持し、進歩の意味においてさらに先へと導こうとする、あらゆる時代の真のオカルティストの精神に従って行動していたのである」。

最後に、ルドルフ・シュタイナーのノヴァーリス研究におけるマリー・シュタイナーの役割に再び目を向け、彼女の命日（12月27日）がまさに「福音史家ヨハネの記念日」に当たっていること、彼女の地上の遺骸が、あの「建築（第一ゲーテアヌム）の大火」の日と同じ12月31日に炎へと委ねられたこと、そして私たちが彼女の没後25周年を偲ぶまさにこの年（※1973年）が、同時にルドルフ・シュタイナーの「最後の演説」から「7×7年（49周年）」の節目に当たっていることを想起するとき、私たちはそこに一つの「カルマのしるし」を見出さざるを得ない。私たちはそこから、マリー・シュタイナーがいかに唯一無二の在り方で、人智学運

動とその内なる生命、すなわちキリスト教の神秘の真理と結びついていたかを読み取ることができるのである。

エミール・ボックはかつてこう語った。――「ルドルフ・シュタイナーの全生涯の業績は、言葉（ロゴス）の復活というサインの下に立っている」と。マリー・シュタイナーの「共に担った奉仕」とは、数ある活動の中でもとりわけ、ルドルフ・シュタイナーがゲーテアヌムをそう呼んだように、「神秘の家」「言語の家」において、この蘇らされた神秘の言葉（ロゴス）に、その言葉の「創造の諸力」にふさわしい発声の様式、すなわち「言語造形芸術」を創り出すことであった。彼女はノヴァーリスの詩の芸術を、この道における特別な「教育者」としてみなしていた。彼女はみずからの比類なき文体をもって、ルドルフ・シュタイナーの講演『霊視者としてのノヴァーリス』（ベルリン、1908年12月22日）に寄せた序文の中でそのことを描写している。本考察を、彼女のこの言葉をもって締めくくることにしよう。

「ルドルフ・シュタイナーがまだ私たちのただ中で活動されていたあの幸福な時代に、私たちが体験することのできた最も聖なる時間の中には、彼がみずからの汲み尽くし得ない秘教的知識の深淵から、新たな命を吹き込んで蘇らせた数々の『年間の祝祭』があった。

それらの祝祭の聖なる時間から生まれる私たちの最も美しい記憶は、ノヴァーリスの周囲に織りなされている。私には、そのような機会にルドルフ・シュタイナーの演説と結びつけて、ノヴァーリスの詩を朗唱するという特別な幸福が授けられた。ノヴァーリスは、私たちを一瞬にして人間の体験の『向こう側』へと引き上げてくれる。そこでは日常が消え去り、個人的なものが削ぎ落とされ、崇拝に満ちた愛の純粋な力が、人間の持つ重々しさや濁りから解き放たれて、みずからを表現しようとする。しかしそれは、この霊的世界を知る目撃者の言葉から唯一無二の在り方で語りかけてくるような、神性への熱烈で激しい『 Hingabe （全き献身・没入）』の炎のただ中においてである。

これを表現する手段を与えてくれるのは、ただ、言語造形の純粋な諸力、すなわち、流動する言葉の運動へと変容した『感情』であり、塑性的・音楽的に解き放たれたイマジネーションのみである。この目標は、私たちの弱き力にとっては確かにあまりにも気高いものであるが、しかし明瞭であり、私たちの心を捉えて離さない。

言葉（ロゴス）の創造力へと向かう教育者としてのノヴァーリス —— その創造力は、彼の内において岩を掴んで肉へと融解させ、水を血へと変え、そうして、体験された聖体拝領の中で肉と血を通じて、共に言葉の力に捉えられた人間を、宇宙に脈打つ『神にして人なるキリストの原理』へと導くのである。神性へと向かう人間の探求を、芸術によって最高の表現へと高めた『司祭』としてのノヴァーリス。キリスト化された自我、すなわちキリストの使命を、内なるキリストの使者として告げる『告解者』としてのノヴァーリス。魂の深淵における、否、『魂のより高次な空間』におけるこれほどの情熱と熱狂を伴う『献身的な愛の力』は、詩の芸術において二度と私たちの前に提示されることはないであろう。

彼に語らせよう。あの数々の夜にそうであったように。あの夜、ルドルフ・シュタイナーもまた、光をもたらし、闇を追い払い、霊と感情に支えられた『啓明の言葉』、そして魂を目覚めさせる『愛の力』を、私たちの魂の奥底へと沈み込ませてくれたのである。」

■マリー・シュタイナー
＝フォン・ジーフェルスについて④

リディア・ジェンティッリ＝バラット（記録者）
「マリー・シュタイナーの思い出」（1947年）

付：「クラウス書簡」（1945年）から2026年4月17日までの
マリー・シュタイナー設立による「遺産管理財団」と
ドルナッハ「一般人智学協会」の完全な和解までの経緯について

○リディア・ジェンティッリ＝バラット（記録者）
「マリー・シュタイナーの思い出」（1947年）

・テキストの出典について：

原題はドイツ語で
『Eine Erinnerung an Marie Steiner』（マリー・シュタイナーの思い出）。
著者（記録者）は Lidia Gentilli-Baratto（リディア・ジェンティッリ＝バラット）
1947年にドルナッハでマリー・シュタイナーと交わした対話を基にまとめられた。

●基本的な視点

1947年頃にドルナッハで行われた、
80歳のマリー・シュタイナーと弟子リディアとの対話の回想。

マリーがルドルフ・シュタイナーの晩年の出来事、
特に毒を盛られたとされる事件、
クリスマス会議に至る理事会の形成と「理事会の理念」（Vorstandsgedanke）、
その後の協会内部の対立と排除、そして秘教的な失敗の本質について、
自らの視点から語った内容が中心となっている。

全体として、個人的な生や組織的な利害を超えて
「人智学の遺産」を人類のために救うという犠牲の精神、
真実を語る勇気の欠如が協会を病ませているという認識、
そして「分裂ではなく治癒」を目指すべき
という呼びかけとなっていて、
マリーの無私で強靭な姿勢と、
協会の現状に対する痛切な批判が対比的に描かれている。

●要点

・ルドルフ・シュタイナーの毒殺とされる事件：

クリスマス会議最終日の晩餐会で毒を盛られた。
マリーは直前に不吉な感覚を覚え、
その後、顔を緑色にして入ってきたシュタイナーが
「私たちは毒を盛られた！」と告げた。
彼女とヴァックスムート博士は飲んでおらず、
シュタイナー自身が牛乳による胃洗浄を夜通し行い、
外部の医者を呼ばないよう厳命した。
以後、肉体は死を免れ得ず、精神の力で約15ヶ月生き延びたものの、
ミカエル祭頃に崩壊した。
マリーはこのことを協会に伝える義務を感じつつ、
抵抗に遭い沈黙を強いられた。

・マリーの犠牲と役割：

シュタイナーの強い希望により、
ドイツでのオイリュトミー公演ツアーに出かけ、臨終の場にいられなかった。
シュタイナーは「肉体はもう救いようがないが、作品は救える」と考え、
マリーの人智学的芸術の仕事が遺産を守る鍵だと見ていた。
二人はすべてを犠牲にし、個人的な生は人類のためのものとしていた。

・理事会の理念（Vorstandsgedanke）と裏切り：

1922年の協会破綻とゲーテアヌム火災後、
シュタイナーが自ら会長に就任することで再組織化を決意。
霊界の意志により、シュタイナーが第一議長、
マリーが第二議長（副会長）とされたが、
マリーの申し出でシュテッフェンが第二議長に。
ただし、シュテッフェンは「常にマリーと一対であること」が条件であり、
生涯彼女の「騎士・保護者」であると誓った。
この約束の上にクリスマス会議が築かれた。
しかし1942年頃、シュテッフェンがこれを裏切り、
自らが理事会の中心と感じ、マリーを排除した。
結果、彼女は「煙たい老婆」や「協会の敵」のように扱われ、
権利を剥奪された。

・協会内の対立と現状：

理事会（特にシュテッフェンら）は
シュタイナーの遺言やマリーの権利を無視し、彼女を中心から遠ざけた。
会員たちは「恐れの悪魔」に支配され、
真実を語る勇気がなく、盲目的な崇拝に陥っている。
マリーは「権利は他の理事の行動そのものになってしまった」と述べ、
亡命の時が熟したと感じつつも、再生を望んだ。

・秘教的失脚（esoterisch versagt）の本質：

シュテッフェンらを「意識的な悪人」ではなく、
「無私になれず、一方的な霊的進歩により道徳的聴覚を失った」存在と評する。
普通の嘘つきは嘘と自覚するが、
ここでは自分の言ったことを善・真実と信じ、過ちを犯し得ないと妄想する。
その影響はカルマ的に結ばれた人々を巻き込み、
学校全体を破滅させうるオカルト的プロセス。
ミカエル・スクールもこれにより損なわれた。
アーリマン的な影響（例：クラウス書簡）も指摘。

・対応の呼びかけ：

真実を大声で、はっきりと、その場で語ること。
沈黙は最悪であり、悪魔を養う。
真実の中にのみ知恵があり、「分裂ではなく治癒」を合言葉に、前を向くべき。
勇気を持たねばならず、個人の無私と義務への献身が不可欠。

なお、この回想はマリー・シュタイナーの個人的見解として提示されていて、
人智学協会内部では対立する見方や評価が存在するものとして位置づけられる。

●本文

モットー
「真理の精神は愛の中にあり、
愛の根源は真理の中に求めよ。」
ルドルフ・シュタイナー

〔編者前書き〕

僅かな部数のみ発行された30ページの小冊子『マリー・シュタイナーの思い出』には、人智学協会、特にその理事会に対するマリー・シュタイナー（ルドルフ・シュタイナー博士の妻）の見解が収められています。とりわけ、ルドルフ・シュタイナーの毒殺未遂、病気、死去、そして遺産を巡る様々な状況に関する彼女の見解や、何よりも、人間が真実と嘘を識別する能力を保持すること、あるいはそれを失うことに関する見解が、リディア・ジェンティッリ＝バラット（またはジェンティッリ＝アレンソン＝バラット、1903–1996）による報告と問いかけを通して記録されています。彼女は1923年から1924年にかけて、ドルナッハのオイリュトミー・グループのメンバーとなった人物です。この小冊子には、上記のほかに、おそらくその娘によって書き残された「アドルフ・アレンソン（ジェンティッリ＝アレンソン＝バラットの義父）の思い出」や、詩「クリスマスの光」も含まれていましたが、これらは別途出版されています。

（中略：表記等についての但し書き）

なお、以下に続く内容は――ジェンティッリ＝バラットによる再現が忠実なものであると見なせる限りにおいて――あくまでマリー・シュタイナーの視点に基づくものである点に留意せねばなりません。これら（例えば、遺産管理委員会の活動について、ルドルフ・シュタイナーの毒殺未遂がもたらした結果やその死因について、マリー・シュタイナーの「正しい」行動とイタ・ヴェーグマン博士側の「正しくない」行動についてなど）に関しては、他の人物たちの見解と少なからぬ点で大きく異なっています。

デヴィッド・ヘルツベルク（仮名）、西暦2016年

●マリー・シュタイナーの思い出

一段低くなったテラスから上方を仰ぎ見ると、丘の斜面の鮮やかなエメラルドグリーンの芝生の向こうに、若々しい白樺やモミの木々が視界に入った。さらに視線を上へと進めると、ゲーテアヌムの建物の造形的な壁面に突き当たる。コンクリートの建物は陽光を浴びて帯紅色の輝きを添え、緑の芝生の上には青紫色の影の輪郭が落ちていた。人工の創造物と夏の自然との間には、色彩豊かに屈折する光による、穏やかな対話が生まれていた。芸術の形をとった精神の豊かさが、その土地を活気づけていた。

コンクリートの建物をぐるりと囲む広いテラスでは、芸術公演の始まりを待つ群衆が歩いていた。ゲーテアヌムを訪れた人々が、色鮮やかで、幸福感に満ち、芸術の息吹を吸い込みながら、多くの人間によって形作られた一つの川のように、あちこちへと移りゆくのが見えた。

ルドルフ・シュタイナー・ハルデ（シュタイナーの居宅）の静かな一角、そのひっそりとしたテラスには、平和と静けさが満ちていた。まるで大気がこの家の能動的な瞑想の力を受け取ったかのように、そこには強い自己意識と「自我（Ich）」が宿っているかのようだった。外の世界に広がる生の営みは、はるか彼方の出来事のように思われた。その一方で、二人の人間が内なる視線を過去へと沈め、今世紀最大の悲劇から謎のヴェールを剥ぎ取ろうとしていた。

あそこにそびえ立つ建物の精神的事業に携わってきた80歳の女性（マリー・シュタイナー）は、我を忘れ、自らの人生の事実を見つめることに没頭していた。その佇まいは、彼女の繊細な容姿と同様に、内面まで透き通っているかのようだった。年齢を感じさせず、肌は子供のように瑞々しいピンク色で、精神は新鮮で、時間を超越していた。白い衣服をまとったその婦人は、いつものように意識を高めるような、すっきりと真っ直ぐな姿勢で座っていた。彼女はまさに「アントロポス（人間）」、すなわち「直立する存在」の原型のように見えた。彼女の前には小さなテーブルがあり、色とりどりの花束が生けられた花瓶が置かれていた。片方の手は、明瞭な筆跡で何かが書き込まれた数枚の白い紙の上に静かに置かれ、もう片方の手は膝の上に置かれていた。彼女は弟子の問いに答えながら、じっと遠くを見つめ、内なるイメージを捉えているかのようだった。はるか昔のある冬の日の光景が、彼女の魂から切り離されたかのように、二人の前に立ち現れていた。

「……そうです、ルドルフ・シュタイナーは毒を盛られたのです。クリスマス会議の最終日、木工作業所（シュライネライ）で行われたルー（晩餐会・レセプション）でのことでした。私も長い間、その広間に座っていました。他の人々がドクター（シュタイナー）の周りを行き来している間、私は誰のことも気にかけることができず、近づいてくる人たちに挨拶するのもやっとでした。なぜなら、理解しがたい、恐ろしい何かが私の魂の前に立ちはだかっていたからです。何かを追い払わなければならないような心地がしていたのに、どうやって、何を追い払えばいいのか分からなかったのです。そうしてじっと座っていることに耐えられなくなり、私は奥にある自分の部屋へと向かいました……」

花束から一枚の葉が、白い紙の上に落ちた。彼女は親指と人差し指でその葉をつまみ、その内なるイメージが言葉に尽くしがたいものであるかのように息をひそめた。それから、彼女の強い本質が持ついつもの無私無欲な様子で、その葉を脇に除けた。

「……私がヴァックスムート博士と話し込んでいたとき、ドクターが突然、この葉のように顔を緑色にして入ってきたのです。彼はドアの柱にもたれかかり、絶望に満ちた眼差しで私たちを見て言いました。『私たちは毒を盛られた！』」

私は恐怖のあまり、まるで体が麻痺したようになってしまいました。ドクターはすぐに、私たちに何か飲んだかと尋ねました。私が何も飲んでいないと答え、ヴァックスムート博士にも何事も起きていないことに気づくと、彼は安堵のため息をつきました。

「では、私だけなのだね。それは良かった」

彼はそう息をもらし、よろめきながら部屋の中へと入ってきました。ヴァックスムート博士はすぐに駆けつけて医者を呼ぼうとしましたが、シュタイナー博士は全力でそれを禁じました。ヴァックスムート博士は「誰一人としてこのことを知られてはならない、医者も呼んではならない」という約束を交わして、その場を離れました。その後、ドクターは部屋にある限りの牛乳をすべて持ってこさせ、自ら胃洗浄を行いました。

その間にも、さらにヴィラ・ハンシ（シュタイナーの宿舎）から牛乳が運ばれてきました。手に入る限りの牛乳が文字通り集められ、彼は夕方から夜通し、この胃洗浄を続けたのです……。

あの日以来、彼は死を宣告されたも同然でした。ただ、精神に深く根ざした彼の超人的な力だけが、その肉体をさらに15ヶ月間も生き長らえさせることを可能にしたのです……。

彼は死がすぐ扉の前に迫っていることを知りながらも、決して自らを労わることをせず、ついに――ミカエル祭（9月29日）の時期に――完全に崩れ落ちてしまいました……。

ええ、彼の死後、私はこのことを協会に伝える義務がありました。しかし、後に私が『我が生涯の歩み（自伝）』の結びの部分で、それについて僅かにほのめかしただけでさえ、理事会側からの抵抗に遭ったのです……。彼らはそれについて、真実を知りたくなかったのです……。この出来事は、彼の遺言と同じように恐れられていました。ですから、私はこれについて、ほとんど沈黙を守らざるを得なかったのです。

まるで恐ろしい深淵を覗き込むかのように、この弟子（著者リディア）の目の前には、師の人生の最後の15ヶ月間にわたる計り知れない苦難が浮かんできました。そして、自分の言葉がどれほど非難を含んでいるかも顧みず、衝動的で信頼に満ちた口調で思わず叫んでしまいました。

「ですがドクター（夫人）、私たちはあの当時、旅に出てしまいました！ あなたはドクターが亡くなることを知っていた、彼が一人残されることを知っていたはずです。なぜ彼を、あのように一人きりにしてしまったのですか！？」

（当時、ルドルフ・シュタイナーの強い希望によって、ドイツでの長期にわたるオイリュトミーの地方公演ツアーが行われていたのです。）

この若い人間の魂の苦悶を感じ取り、賢明な婦人は疲れたように微笑みました。

「シュタイナー博士がそれを望まれたのです。彼の肉体はもう救いようがなく、死を免れませんでした。しかし、彼の作品（遺産・事業）は救うことができたのです！」

ルドルフ・シュタイナーの協力者としての、彼女の鉄のように強固な精神の構え、そして運命から課せられた計り知れないほど重大な義務の全容が、そこに厳然と立ち現れていました。彼女はより穏やかな口調で会話を続けました。

「シュタイナー博士は度々私にこう言われました。私に委ねられた人智学の芸術の仕事こそが、彼の作品を救うことになるだろう、と。少なくとも、彼の弟子たちの意識が十分に成熟するまでの間は。私の働きがあって初めて、彼の遺産は人類のために、余すところなく、完全に救われるのだと彼は考えていました。彼の作品のために、私たちは二人とも、すべてを犠牲にしてきたのです。だからこそ、彼は私にこの最後の犠牲をも求められた。私の涙を前にしても彼は揺るぎませんでした。なぜなら、私たちの個人的な生はすべて人類のためのものであり、私たち自身のためのものではなかったからです。ですが、この最後の犠牲、すなわち彼をあのまま置いて旅立たねばならなかったことは、私の人生において最も耐え難い苦痛でした……。彼は人智学的芸術の中に、新しい精神的な心構えへと至る架け橋を見ていたのです」

ここで彼女は頭を垂れました。千切れた花の一部が、彼女の膝の上に散らばっていました。まるで自分自身から何かを遠ざけようとするかのように、あるいは遠い日の記憶の重圧を払いのけようとするかのように、彼女は服の上の花殻を何度か手で払いました。その弱々しい身振りは、内に秘められた揺るぎないストイックさと相まって、同行していた弟子にとって、彼女の存在をいっそう愛おしく感じさせるものでした。これほど強く、無私無欲な人格は、自らにいかなる弱さも許さないものです。そのため、その場を覆っていた重苦しい空気はすぐに打ち消され、彼女はまるで第三者の人生について語るかのような口調でこう話しました。

「私の願いに応じて、ドクターは死が近づいたと感じたら、すぐに私を呼び寄せると約束してくれました。そして実際に彼はそうしてくれたのです。しかし、彼の要請はすぐには実行されませんでした。ですから、彼が目を閉じた瞬間に私が遠く離れていたのは、決して私たちの過ちではなかったのです……」

弟子の魂に、かすかな世界の因果の光が差し込んできました。それは、精神的先駆者たちの小さなグループが、その指導者たちの苦難の海を通り抜けることで、さらなる前進を遂げるための因果でした。犠牲という名の圧倒的な現実が、歴史という出来事の鍛錬を経て、そこに厳然と聳え立っていました。彼女の魂の中では、波が打ち寄せるように、この言葉が何度も何度もリフレインしていました。「彼の肉体はもう救いようがなかった。しかし、彼の作品は救うことができたのだ……」

マリー・シュタイナー博士の前にあっては、感傷に浸ることなど到底不似合いなことでした。彼女の言葉は、物事のありのままの真実を知り尽くし、地上の揺れ動くものや、いつかは死にゆく時間的なものよりも遥か高くに、精神的な働きを見出している人のそれへと、次第に明るくユーモラスな調子を帯びていきました。

「そして、それが今の現状というわけです」と、彼女は朗らかに言いました。「私たちがすべてを人智学協会に捧げたというのに、今や協会は、彼のことを『自分の遺産について遺言を遺す資格すらなかった愚か者』のように扱い、私のことは『師の財産を協会から盗み取ろうとしている泥棒』のように扱っているのです……。世の中、そういう風に回っていくものなのですね！」

「ドクター、もう一つ伺いたいことがあります」と弟子は言いました。
「あなたは、決して理事会を辞任されたわけではありませんよね？」

マリー・シュタイナー夫人は面白そうに視線を向け、それを否定しました。

「それなら」と弟子は続けました。
「あなたが辞任されていないのであれば、たとえ代表ではなくとも、あなたは依然として理事（ Vorstand ）であり、他の理事会メンバーと全く対等な権利を持っているはずです。あなたは協会の会報の一部を自由に使えるはずですし、理事としてご自身の意見を述べる権利があるはずです。なぜ、会報『人智学協会の動向（ Was in der Anthroposophischen Gesellschaft vorgeht ）』の4ページのうち、せめて1ページだけでも要求されないのですか？ あなたが理事として彼らに語りかけず、自分の私財を使って小さな片隅で独自の会報を維持しているようでは、会員たちはあなたの言わんとしていることをどうやって知ればよいのでしょう？ そんなことは不当ですし、あってはならないことです。あなたは中心に属しているのです。シュタイナー博士が仰っていたように、あなたこそがこの運動の共同創設者なのですから」

「まさにその通りなのです。しかし……私は退けられてしまいました。私だけでなく、シュタイナー博士までも。あなたも……それをお読みになりましたか？ 私は自分の国にいながら、まるで異邦人のように扱われているのです。あなたは権利だの不義だのとおっしゃる！ 権利とは、他の理事たちが行動し、発言し、広め、望むことそのものの定義になってしまっている。私にはもう何の権利もありません。完全に権利を剥奪されているのです。もし私がまだ若ければ、戦いもしたでしょう。しかし私は老いすぎてしまいました……亡命の時が熟したのです」

「ドクター（夫人）、今起きていることは本当に卑劣なことです！ しかし、どの会員にも個人の権利と義務があります。他の誰かに義理立てするような新しいグループとしてではなく、全くの個人として、単一の会員として私たちは権利を持っているのです。私たちはあなたのために立ち上がります。理事会のメンバーがこのような扱いを受けるなんて、これ以上放置しておくわけにはいきません！」

「やってみなさい。しかし、個人として行動するには、よほど強くあらねばなりません。あなたはイタリア人ですね。正義に対する感覚は、イタリアの民族精神に深く根ざしているものですから……」

「行動を起こすために、私は二つのことを知らねばなりません。第一に、あなたが『理事会（ Vorstand ）の理念』として何を理解されているかということです。あなたはすでに1942年、つまり遺産管理協会（ Nachlassverein ）を設立される前、アルベルト・シュテッフェンへの手紙の中で、彼が『理事会の理念』を裏切ったと書かれていました。裏切りは、その人への信頼を失うに十分な理由です。しかし、彼が裏切ったという、その『理事会の理念』とは一体何なのでしょうか？」

「よくぞ聞いてくれました。会員たちはこれらのことを知るべきなのです。これを知る者はごく僅かしかおらず、その人々も絶え絶えになって世を去っています。そして、『理事会の過半数』への盲目的な崇拝の中で育てられてきた人々が、真実の事実関係を知らされずして、どうして事の真相を認識できるというのでしょう？ そして、最初からその場に立ち会っていた者以外の誰が、彼らにそれを語れるというのですか？ しかし、今の私には、一握りの人々を除いて誰も耳を傾けようとはしません……。真実を知る会員があまりにも少なすぎますし、その数少ない人々の中でさえ、それを声高に語る勇気を持つ者はほとんどいません。これこそが運動を病ませている原因であり、あらゆる場所で『真実を語る勇気』が欠如しているからこそ、協会は機能不全に陥っているのです。もし人々が、自分の知っていることや考えていることをそのまま口にしていたなら、これほどの恐ろしい亀裂にはならなかったでしょう。しかし、ここドルナッハの丘の上では『恐れの悪魔』が支配しており、その恐ろしい重圧で会員たちの魂を押し潰しているのです。おそらく、私の死によって協会は目覚めることになるでしょう。しかし、その目覚めは新たな分裂ではなく、再生をもたらさねばなりません。ヴェーグマン博士の除名処分の時のような過ちを、二度と繰り返してはならないのです。ただ手が過ちを犯したからといって、自分の手を切り落とす者などいません。私たちは前へ、前へと目を向けねばならない。『分裂ではなく治癒（ Heilung ）』、これこそが合言葉です。知恵はただ、真実の中にのみあるのです……。

しかし、真実に至るために何よりも必要なのは、勇気です！ 会員たちはまるで腑抜け（ Waschlappen ）であり、優れた男たちでさえ、理事会の紳士たちの前へ出ると、叩かれた犬のようになってしまう。彼らは私やシュタイナー博士が攻撃されるのを、文句ひとつ言わずに黙って見過ごしている。それは、ここの悪魔たちが強大になりすぎてしまったからです……。あなたはイタリアから来られたばかりだから、ここで何が働いているのか、見当もつかないでしょう。私自身、ドルナッハを去らねばならなくなるでしょう。そして、この景色を――（彼女は手で、輝くゲーテアヌムの建物を指し示した）――二度と見られなくなるのは、とても名残惜しいことです……。しかし、私が去ったとしても、彼らは目覚めないでしょう。あの煙たい女が遠くへ行ってくれたと、むしろ喜ぶに違いありません……。

理事会の理念、それはクリスマス会議に至る前史の一部です。1922年、戦争の結果によってドイツの協会が破綻し、古い（初代）ゲーテアヌムが放火で焼け落ち、敵対勢力の力がすべてを破壊しようと脅かしていたとき、シュタイナー博士と私は、協会から身を引き、いかなる組織的束縛からも離れて、再び純粋な運動の仕事に専念しようと考えていました。会員たちの度重なる過ちが、シュタイナー博士の周囲に有刺鉄線を張り巡らせてしまい、彼は身動きが取れず、すべての力をその対処に奪われていたからです……。しかし、私たちは会員たちのことが不憫でなりませんでした。そこで私たちは、クリスマス会議の本当に、本当に直前になって、協会の再組織化を決意したのです。しかし、それは彼（シュタイナー）自らが協会の会長に就任することによってのみ可能となる道でした。これが彼の命を縮めることになるということを、彼自身は自覚していましたが、私には分かっていませんでした。彼はすべてを全く新しく立ち上げ、私たちはこの事業で、誰が私たちと結ばれて仕えてくれるかを注意深く探しました。ユンガーは最初から除外されていました。彼はドイツに自らのカルマを持っていたからです。そしてシュタイナー博士は、ユンガーが自分の死後まもなく亡くなることを、おそらく見抜いていました。ご存知のように、ユンガーはかつて、私たちが亡くなった場合に遺産を相続する人として予定されていたことがありました。しかし、それは後に変更されたのです。ユンガーは重い宿命を背負っていました……。シュタイナー博士は新しく、より若く、新鮮な人材を求めており、私や他の友人たちが候補を提案することになっていました。それはスイス人であるか、あるいはスイスに住んでいて、その地のカルマの知らせをもたらす人物であるべきでした。このような場合、シュタイナー博士はいつも私に提案を求められたものです。病床に伏しながらもシュタイナー博士の命を救ったことのあるミス・マリオン（メアリー・マキシー）は、以前からこの創設における重要な一員でした。そして、私たちの親愛なる友人であり、最大の魂の献身をもってルドルフ・シュタイナーに従ってスイスへやってきた（いや、むしろ先陣を切ってやってきた）イタ・ヴェーグマン博士は、私自身が提案した人物でした。彼女はシュタイナー博士からも『財務の天才』として認められており、フツゥールム（ Futurums ）が崩壊した際には彼に重要な助言を与えたため、博士は彼女に深く感謝していました。当時、私たちは感謝の印として、彼女に私の薔薇十字の指輪を贈ったほどです。彼女はすでに自身のクリニックで素晴らしい成果を上げていました。博士は、このような大事業において非常に重要となる実務的な能力の面でも彼女を高く評価しており、私の提案を喜んで受け入れてくれたのです。また、シュタイナー博士がとりわけ高く評価していた才能ある詩人であり、スイス人として非常に好ましい要素をもたらしてくれるアルベルト・シュテッフェンも、私から提案しました。その時、シュタイナー博士は私に『それはカルマ的だね』と言われました。私たちはシュテッフェン氏を非常に高く評価するようになっていたのです」

「シュタイナー博士は、これほど若い人たちに多くの責任を負わせるのは時期尚早ではないかと恐れていましたが、彼らを補佐し、この若い一団を徐々に育てていく時間は十分に調整できるだろうと期待していました。ヴァックスムート博士はもっと後になって、おそらくヴァカーノ夫人から提案されたのだと思います。私は彼のことをほとんど知りませんでした。

シュタイナー博士は、私に彼とともに議長（共同代表）の座に就くよう執拗に求めました。しかし、私の貧弱な力では、協会とオイリュトミーなどの芸術の双方を責任を持って担うことなど到底できませんでした。当時、私は彼を待ち受けている悲劇を予感すらしておらず、彼はまだまだ長く生きるものと信じきっていたのです……。彼が度々私に語り、後に声を大にして訴えていたこと――大晦日の夜の恐ろしい出来事（注：大晦日の夜：1922年12月31日の初代ゲーテアヌムの火災）によって、自らの肉体的な抵抗力が弱まってしまい、そのため以前のようにすべてを耐え忍び、克服することができなくなってしまったのだということ――を、私は十分に受け止めていませんでした。

こうして、彼、シュテッフェン氏、そして私の三人による、極めて重要な最初の会議が開かれました。それはクリスマス会議の真の前、シュテッフェン氏が書いているように、おそらく12月19日のことだったのでしょう。私にはもう正確には分かりません。それは、私たち三人（シュタイナー、マリー、シュテッフェン）を一連の単位へと結びつける、深い宿命（カルマ）の瞬間でした。この会議の内容を知っていた人間はごく僅かでしたが、アレンソンとユンガーはそのことを知っていました。この会議の席でドクターは、霊界の意志に則り、自らが協会の第一議長（会長）に就任すること、そして霊界からは私が第二議長（副会長）および彼の代理として指名されていることを私たちに告げました。私はそのすべてをすでに知っていましたが、それでもなお、人生の最後の数年間は自分の運命的な使命である『人智学的芸術』に捧げたいと考え、この仕事にはもっと若い人材を起用してほしいと、彼に重ねて願い出ました。――私はよく、自分はシュタイナー博士よりも先に死ぬのだろうと考えていたのです。彼はいつもあれほど健康で強靭なのに、私はいつも病気がちだったのですから！

シュタイナー博士はこの辞退を受け入れませんでした。しかし、私が『これから人智学協会がなろうとしているような世界的な協会において、外の世界から見たときに、シュタイナー夫妻が第一議長と第二議長として名を連ねることは、あまり好ましい印象を与えないのではないか』という異議を唱えたとき、彼は私のこの第二の提案を受け入れ、シュテッフェン氏を第二議長（副議長・代理）に任命することに同意したのです。ただし彼は、霊界の意志に則り、シュテッフェン氏がその地位にあるのは、あくまで『私と常に一対（ Vereint ）であること』が条件であると強く強調しました。その際、シュテッフェン氏はドクターに対し、自らのカルマに従って、生涯にわたり常に私の『騎士（ Ritter ）』であり『保護者（ Beschützer ）』であり続けると約束したのです。

これこそが、私たちの間で『理事会の理念（ Vorstandsgedanke ）』と呼ばれたものの正体です。なぜなら、彼が第二議長として霊界の前で完全な正当性を持つのは、私を抜きにしてはあり得ないからです。アルベルト・シュテッフェンが交わしたこの約束の上に、かつて初代ゲーテアヌムを建築した旧・人智学協会の『再

組織化』としての、あのクリスマス会議が築かれたのです。彼は常に私と結ばれてこそ、協会における自らの職務を正しく全うできるというこの事実を全面的に認め、アルベルト・シュテッフェンは私たちの仕事を支えることを誓いました。しかし、1942年の夏季会議において、彼はこの約束を完全に裏切ったのです。それ以来、彼は自分自身だけが『理事会』であると感じるようになってしまいました。私は完全に排除されたのです。私は煙たい老婆、協会の敵として仕立て上げられました。しかし、彼の言う協会の本当の『敵』とは、遺言によって私を全世界の前で自分の傍らに立たせた、ルドルフ・シュタイナー博士その人だったのです。シュテッフェン氏は、ドクターのこの決定が許せないのです。だからこそ、私は会員たちから遠ざけられ、私の言葉はもはや彼らに届かなくなってしまいました。理事会におけるすべての権利の主は、シュテッフェン氏ただ一人であり続けたからです。これこそが、私が1942年にシュテッフェン氏に書き送った『あなたは理事会の理念を裏切った』という言葉の意味なのです。――さて、あなたの第二の質問は何でしたか？」

「戦争が終わった後、」と弟子は話し始めました。「リーナ・シュヴァルツが、ドルナッハからのあらゆる不愉快な知らせを携えてイタリアに戻ってきました。私たちは、ようやく戦争が終わり、すべての高邁な人智学徒たちが、この愛する土地へ国境を越えて集えるようになるのだと思っていました。それなのに、なんと理事会内部での戦争が、協会を骨の髄まで荒らし回っていたのです。

ドクター（夫人）、私は知りたいのです。人間的な未熟さや、個人の性格上の欠点から『過ちを犯してしまう』人と、『秘教的に失脚した（ esoterisch versagt / 霊的な敗北を喫した）』がゆえに『誤った道へ進んでしまう』人との違いは何なのでしょうか。リーナ・シュヴァルツがシュテッフェン氏についてそのように評したとき、私は彼女に詰め寄りました。ドルナッハの悪質な噂話（ゴシップ）だと思ったからです。しかし彼女は、他ならぬドクター、あなた自身がそう仰ったのだと言いました。あなたは理事会の同僚について、そのように言及されたのです。この一連のできごとには、私にとっても理解しがたい、苦しめられることがあまりにも多すぎます。ドルナハのこの悲劇の謎は、本当に人間の力を超えています。そしてまさに、誰かが『秘教的に失脚した』ということが何を意味するのか、私には理解できないのです。しかし、あなたのような高位の参入者が口にされたその言葉の中にこそ、ドルナッハの悲劇の核心が隠されているような気がしてならないのです」

「ええ、私はそう言いました。そう言うことで、私はあの二人の紳士（理事たち）を弁護した（情状酌量した）のです。なぜなら、これほど若く未熟なままで、協会全体の責任を負わねばならないというのは、あまりにも重労働だからです。もしそう言わなければ、彼らは私からすべてを奪い取り、シュタイナー博士の意志に背こうとする『悪党』だと言わねばならなくなります。彼らは意識して悪を行う悪人だと言わねばならなくなります。しかし、事実はそうではないのです。彼らは『無私（自己犠牲的）』になれない人間であり、だからこそ敵対勢力（ Gegenmächte ）が彼らを通して介入することができたのです。彼らは自分自身をシュタイナー博士や私よりも上に置いているのですが、自分たちがそうしていることにすら気づいていないのです」

「それはまるで、誰かが正気を失い、その意識が別の性質のものにすり替わってしまっているかのようですか？」

しばらくの間、弟子の魂には重苦しい沈黙がのしかかっていた。それから、人智学運動の高潔な共同創設者は、重大な言葉を口にした。

「ええ、リディア、あなた自身もいずれ経験することになるでしょう。シュテッフェン氏は道徳的な聴覚（ moralische Gehör ）を失ってしまいました。彼は何が正しく、何が間違っているのかを、もう識別できないのです……」

これらの言葉は、運命の重みを湛え、不屈の意志を伴って、大気の中に鉛のように落ちていった。その一方で、この畏るべき婦人の声は、静かに、痛みに満ち、物思いに耽るように続いた。

「このように、人間は一方的な霊的進歩（ einseitigen geistigen Fortschritt ）によって、ただの普通の人間としてだけでなく、霊的参入の徒（ Geistesschüler ）として、自らの囚われ人となり、敵対勢力の誘惑に陥ることがあるのです[6]。神秘劇はご存じでしょう。それが人生においてどのように現れるかというと、正しいもの、真実なるものへの感覚を失ってしまうという形をとるのです。普通の人間は嘘をつきます。しかし、それが嘘であり、真実は全く別のものであることを自覚しています。ここでは全く違います。ここでは、人間は何かを『自分が言ったから』という理由だけで、それが善であり、気高く、真実であると信じ込み、自分は過ちを犯し得ないと思い込むのです。彼の思考はあらゆる事実の認識から離れ、妄想の中に生きます。しかし、彼が参入への道にある個体であるならば、その没落において、カルマ的に彼と結ばれている人々をも巻き込んでしまうのです。なぜなら、もし彼が普通の人間であれば、まあ、そういうこともありますし、害は少なくて済みます。しかしここでは、彼の本質の影響が他者へと拡大していくのです。あなた自身も経験するでしょう。最も優れた人々、才能ある素晴らしい人々が、もはや主体的に思考できなくなり、彼らの道徳性は普通の嘘つきよりも遥かに深く沈んでしまうのです。彼らは恐怖の源を撒き散らします。彼らに抵抗できる者は滅多にいません。これは、秘教的な活動に奉仕しようとする学校（精神的共同体）において繰り返され、それを破滅へと導くオカルト的なプロセスなのです。地球上における私たちの学校、ミカエル・スクール（自由人智学精神科学高大）も、これによって破滅させられました。なぜなら、その本質は真実だからです。その死とは、嘘と妄想なのです」

「では、それに対して一体何ができるのでしょうか？」弟子は魂の苦悶の中で言った。

「真実、真実、そしてさらなる真実を、大声で、はっきりと語ることです。もし妄想に囚われた魂たちが目覚めることができるとすれば、それは真実によってのみ目覚めるのです。真実を隠蔽することは、人間がなし得る最悪のことです。あとは、真実への奉仕の中で、自らの道を一人で、全く一人で歩むことです」

「しかし、もし誰かが真実を認識できないとしたら、どうやってそれを聞くというのでしょう？」

「秘教的な生とは一つの事実であり、秘教においては真実が働き、正しいものが働き、善が働くのです。そこでは大気が浄化され、悪魔たちは追い払われます。嘘つきの周りには悪魔が集まります。彼らは養われ、魂の力を吸い取り、強くなっていきます。しかし、その逆もまた真実です。私たちの魂の力は、霊界における食物なのです。シュタイナー博士がこれについて語ったことを、真剣に受け止めねばなりません。ただ考える、都合よく考えて沈黙するのではなく、嘘に直面したその瞬間に、その同じ場所で、ただちに真実を突きつけるべきなのです。そうしなければ、常に手遅れになります。手遅れに。後からでは、二倍の困難が伴います……。

クラウス書簡は、アーリマンによって書かれたものです。アルベルト・シュテッフェンは、この手紙を知らなかったと言っています。しかし、ソロモンがヒラムの死を望んだように、彼はこの手紙がもたらす結果を望んでいたのです。したがって彼は、アーリマンのこの最高傑作が引き起こした嘘の連鎖を止めるために、何一つ、全く何一つ行動しませんでした。なぜなら、彼自身がこの手紙と、そこに含まれる不真実を魂の底から望んでいたからです。人々はシュタイナー博士の遺言に反対して動き、私を死に至るまで精神的に消耗させ、私から遺言書と特定の手紙を奪い取ろうとするでしょう。しかし、彼らが成功することはありません。

もし人間が完全に無私となり、大義のために個体性を強め、個人的なあらゆること、すべてを本当に放棄する覚悟があるならば、それは成功するでしょう。これらのことが私にとって当たり前のことだったなどと思わないでください。私自身、語るのが遅すぎたのです。私も、勇気を得るまでに多大なる苦労をしました。悪魔たちは真実を恐ろしく恐れています。真実に対しては、いかなる武器も持たないからです。彼らは、私たちが麻痺してしまうほど強大になります。悪魔たちは私たちの意志を麻痺させるのです。あなた自身も経験したはずです。認識された悪行に対する道徳的な反発は、今日では極めて稀なことであり、少なくとも私たちの間ではそうです。人は常に、正しい側にある人々に対して腹を立て、間違っている側にある人々に対しては同情と感傷に満ちあふれます。私に対しては、常に譲歩することが求められます。しかし、私は自分の義務を人から奪わせるつもりはありません！」

その力強い表現は、弟子の目の前に、義務に奉仕することに捧げられた生涯をはっきりと描き出しました。これらの言葉を口にした女性は、自らの人生の行為によってそれを証明してきた人だったのです。

沈みゆく夕日を浴びて、あの建物（第二ゲーテアヌム）が赤々と輝いていた。それは、かつて同じ丘の上に立っていた初代ゲーテアヌムの記念碑としてそびえ立っている。周囲はすっかり静まり返り、はるか上方のテラスにいた訪問者たちも立ち去って、丘全体から人影が消えていた。近づきつつある夜の影の中に、死へと向かう別れの哀愁が漂っていた。しかし、翼を得たかのような軽やかな歩みで、精神への信頼（Geistvertrauen）がそこへ近づきつつあった。

●「クラウス書簡」（1945年）から2026年4月17日までの
マリー・シュタイナー設立による「遺産管理財団」と
ドルナッハ「一般人智学協会」の完全な和解までの経緯について

1945年の「クラウス書簡」の発信から、2010年代半ばの著作権保護期間終了、そして現代（2025年〜2026年）の完全な和解にいたるまでの、ドイツ語圏の歴史検証史料（Anthrowebなどの記述）に基づいて、その概略をまとめました。

①破局の引き金となった「クラウス書簡」（1945年）

ルドルフ・シュタイナーの没後、遺された膨大な講義録や遺稿の管理を巡り、妻マリー・シュタイナーが設立した「遺産管理財団（Nachlassverwaltung）」と、ドルナッハの「一般人智学協会（Allgemeine Anthroposophische Gesellschaft）」の対立は頂点に達した。

【クラウス書簡（1945年）の要旨】

「マリー・シュタイナー氏がルドルフ・シュタイナーの全著作物におけるすべての権利の唯一の所有者である、という主張は法的に認められない。これらの権利は、マリー氏個人に帰属するものではなく、排他的に人智学協会に帰属すべきものである。 したがって、遺産管理側が単独で出版や権利をコントロールする行為は、協会の正当な権利を侵害していると言わざるを得ない」

この書簡は、マリー側に対する事実上の宣戦布告となった。精神的・法的な正統性を否定されたマリー側は激怒し、両者の陣営は完全に硬直化。1948年にマリーがこの世を去ると、対立の舞台はそのまま法廷へと持ち込まれた。

②法廷闘争と「完全な分断」（1949年〜1950年代）

1949年から始まった裁判は、人智学運動の歴史の中で最も痛ましい「内紛」として記録されている。

【裁判の経過と判決の概略】

・協会の主張：「シュタイナーの思想や講義は、協会という公的な場で行われたものであり、協会の共有財産である」

・遺産管理財団の主張：「シュタイナーは生前、すべての権利を妻マリーに託した。彼女の遺志を継いだ我々こそが、全集を正しく編纂する正当な継承者である」

・司法の結論（1952年）：
スイスの裁判所は、「マリー・シュタイナーの遺言および遺産管理組織の権利の正当性」を全面的に認める判決を下した。

裁判には勝ったものの、遺産管理側と協会側は「同じドルナッハという街にいながら、互いに口も利かない」という数十年にわたる深い分断の時に突入した。遺産管理側は独自の出版社を立ち上げ、協会とは一切交わらず、『ルドルフ・シュタイナー全集（GA）』の編纂を孤独に進めた。

③沈黙を破る世代交代と「2015年の節目」

2000年代に入ると、当時の当事者たちが世を去り、新しい世代へと組織の舵取りが移り、2015年の著作権保護期間の終了（死後70年）」が歴史的な転換点となった。

【和解へのプロセスの概略】

・「排除」から「共有」へ：

2015年末をもって、シュタイナーの著作権は法律上、パブリックドメイン（公共の財産）となった。これにより「どちらが排他的な権利を持つか」という法的な争点そのものが消滅した。

・拠点の統合：

遺産管理組織は「ルドルフ・シュタイナー遺産管理財団」へと改組され、その本拠地を協会本部である「ゲーテアヌム」の近くへ移転し、物理的な距離が縮められた。

・「文化遺産基金」の共同設立：

権利を争うのではなく、「シュタイナーが遺した膨大な直筆ノートや速記、黒板絵などの貴重なオリジナル資料を、未来のために共同で保存・維持していこう」という共通の目的のために、両組織が共同でファンドを設立。歴史的な握手を交わした。

④現代（2025年〜2026年）の結実と全集の完結

1945年のクラウス書簡から80年、この和解は単なる「休戦」ではなく「完全な統合」へと結実した。

【直近の展開について】

・出版社の合併（2025年）：

長年、別々の組織としてシュタイナーの本を出し、競合・対立していた「ルドルフ・シュタイナー出版社」と、協会側の「ゲーテアヌム出版社」がひとつの共同出版グループ（Philosophisch-Anthroposophische Verlage AG）として公式に合併した。

・全集完成と共同式典（2026年4月17日）：

マリー・シュタイナーがかつて夢見、断絶の中で地道に編纂が続けられてきた『ルドルフ・シュタイナー全集』（全約450巻）が遂に完結。この歴史的な日を祝うため、一般人智学協会と遺産管理財団は、かつて決裂の舞台となったゲーテアヌムの大ホールで「共同の公式祝賀式典」が華々しく開催した。